

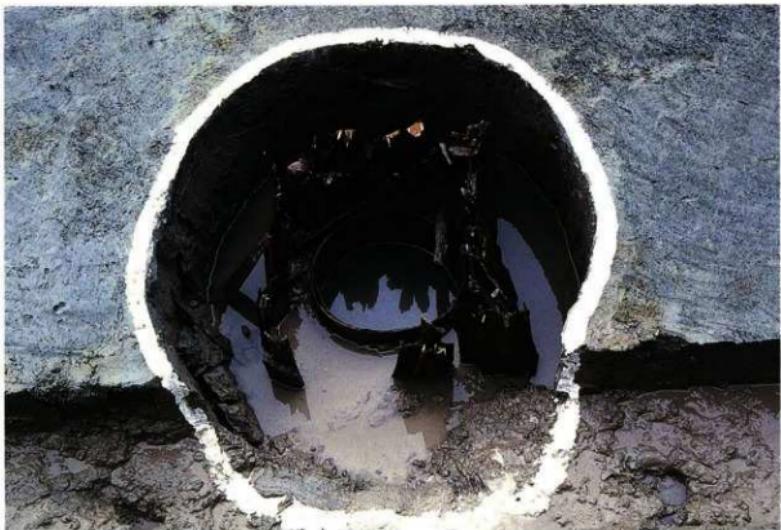
大阪府茨木市

平成 8 年度発掘調査概報

平成 9 年 3 月



茨木市教育委員会



目垣遺跡 SE-04 検出状況（東から）



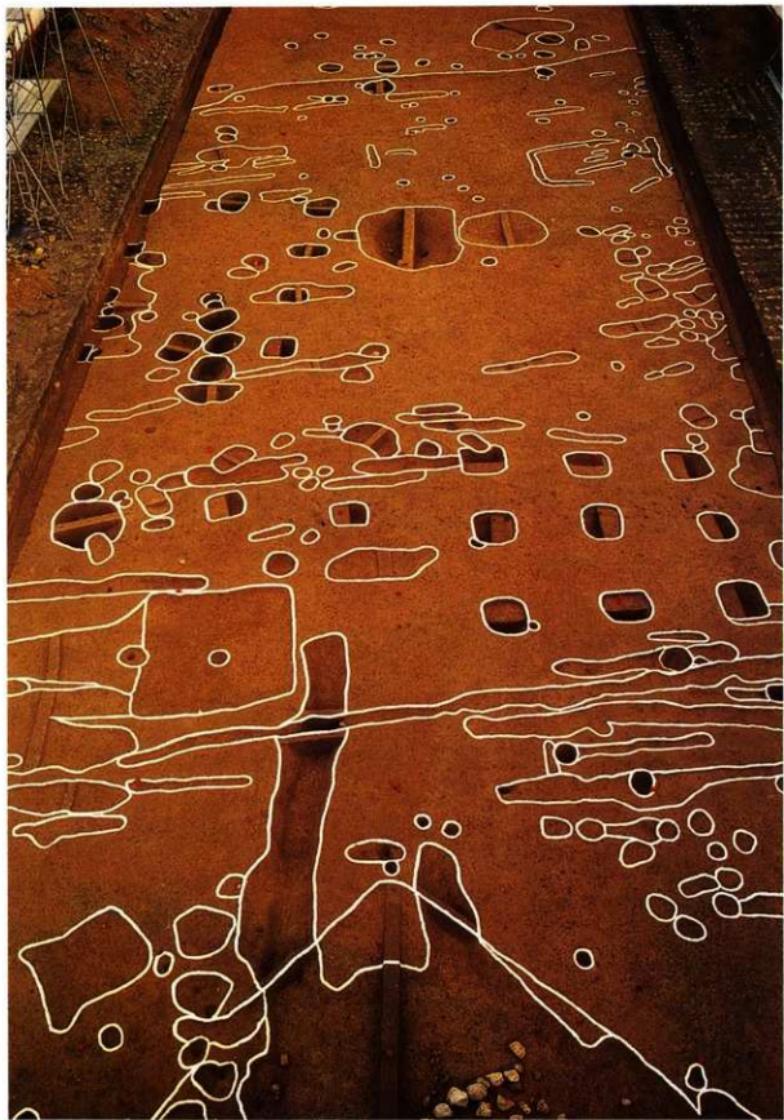
目垣遺跡 SE-02 検出状況（東から）



耳原遺跡 調査地西半部全景（東から）



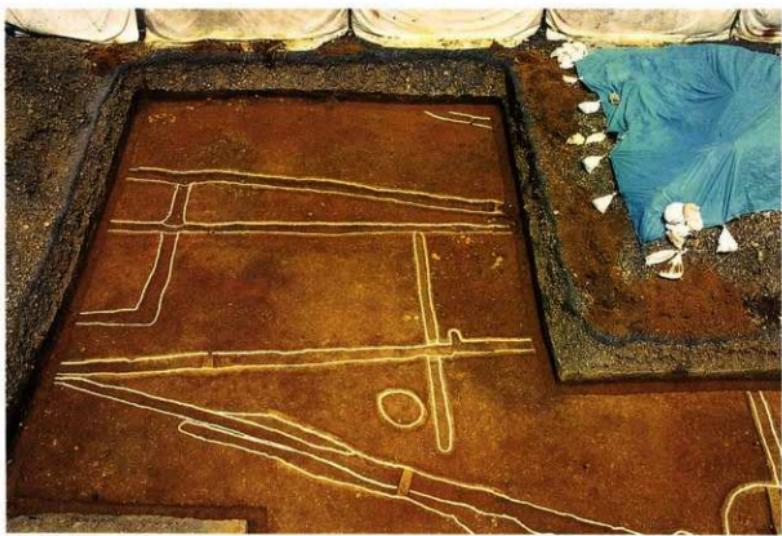
耳原遺跡 調査地東半部全景（西から）



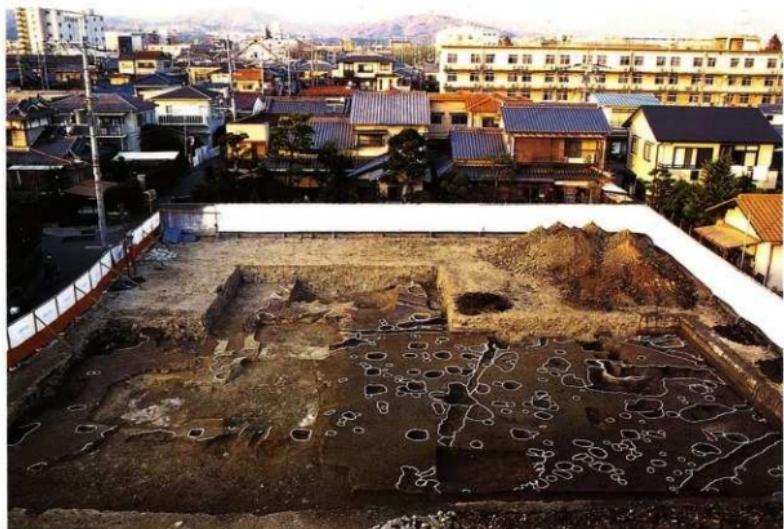
總持寺北遺跡（S J - N • 95 - 1）調査地全景（西から）



總持寺北遺跡（S J - N • 95-1）SK-12遺物出土状況（東から）



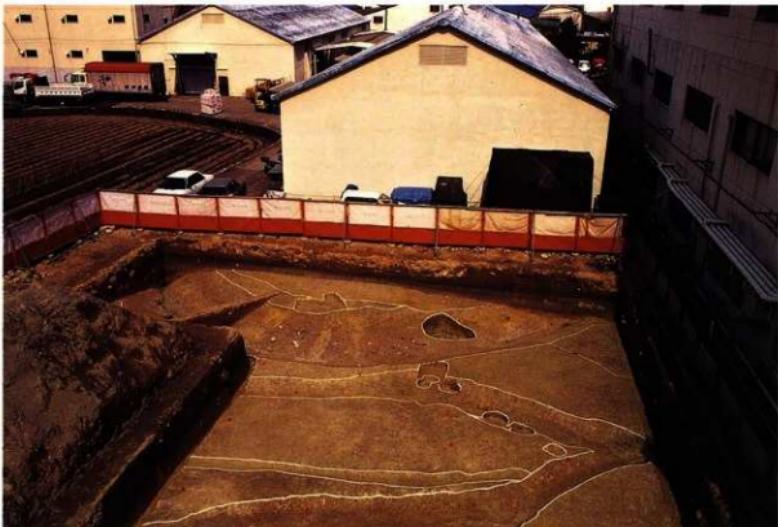
總持寺北遺跡（S J - N • 95-1）調査地全景（南から）



春日遺跡（KS・95-2）調査地全景（南から）



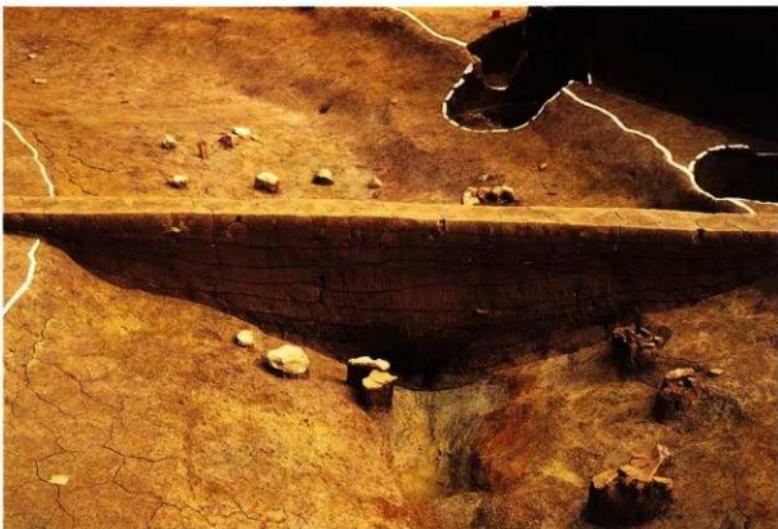
春日遺跡（KS・95-2）SD-04須恵器検出状況（南から）



春日遺跡（KS・95-3）調査地北半部全景（南から）



春日遺跡（KS・95-3）1号墳検出状況（南西から）



春日遺跡（K S・95-3）1号墳周溝内断面（西から）



春日遺跡（K S・95-3）1号墳周溝内蓋形埴輪の立飾り検出状況（南から）



安吉遺跡 調査地全景（南から）



安吉遺跡 自然河道内弥生時代後期器台検出状況（東から）

序 文

老の坂山地の麓と淀川北岸の間に位置するわたくしたちのまち茨木市には、埋蔵文化財をはじめとしてさまざまな文化遺産が残されています。

本市教育委員会では、市域内における開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を開発者のご理解とご協力のもとに行っており、これまでにも貴重な成果をおさめています。

今般、平成7・8年度に実施したものの内から日垣遺跡・耳原遺跡・総持寺北遺跡・春日遺跡・安威遺跡の5遺跡について報告いたします。

特に、日垣遺跡からは主に鎌倉時代を中心とする集落跡の一端が検出されており、耳原遺跡においては弥生時代前期の遺構・遺物が検出されています。

また、総持寺北遺跡では飛鳥時代から平安時代前期初頭までの掘立柱建物などが検出され、遺跡の範囲が北にも延びることが判明したり、春日遺跡からは古墳時代後期の埋没古墳が検出され、今まで知られていなかった古墳についての貴重な資料を新たに得ることができました。

以上のようなことを含めて、今回報告する各遺跡の発掘調査成果は、本市の歴史を構築する貴重な資料の一つとなり、このような地道な資料の積み重ねが、本市文化財の保護・保存対策にとって必要不可欠なものであると考えてます。

あとになりましたが、調査にあたり深いご理解と惜しみないご協力をいただきました関係の皆様に深く感謝いたしますとともに、今後とも本市の文化財の保護・保存になお一層のご理解とご援助を賜りますようお願い申しあげまして、序文といたします。

平成9年3月31日

茨木市教育委員会

教育長 村 山 和 一

例　　言

- 1 本書は、茨木市教育委員会が主体となり平成5・6・7・8年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査概要報告である。
- 2 本報告書において取りあげる内容としては、目垣遺跡・耳原遺跡・総持寺北遺跡・春日遺跡・安威遺跡の5遺跡である。この遺跡の調査期間・調査担当者・原因者・施工業者は、下記の通りである。

目垣遺跡（MG・93-1） 平成5年11月25日～12月24日・濱野 俊一
井上 幸三・㈱掛谷工務店・東海アナース㈱

耳原遺跡（MH・94-1） 平成6年5月23日～7月4日・濱野 俊一
惣埜 力・服部建設㈱・東海アナース㈱

総持寺北遺跡（SJ-N・96-1） 平成7年11月20日～平成8年1月8日・濱野 俊一
太田 善仁・㈱長谷工コーポレーション・安西工業㈱

総持寺北遺跡（SJ-N・97-1） 平成8年7月10日～8月12日・濱野 俊一
山口 義教・森繁建設㈱・安西工業㈱

春日遺跡（KS・95-1） 平成7年11月8日～12月18日・濱野 俊一
㈱リクリートコスモス関西支社・東海アナース㈱

春日遺跡（KS・95-3） 平成8年2月20日～3月25日・濱野 俊一
新大阪スバル㈱・日産建設㈱・安西工業㈱

安威遺跡（AI・97-1） 平成8年4月10日～4月26日・濱野 俊一
㈱レックス・エステート・矢作建設工業㈱・東海アナース㈱
- 3 現地調査及び内業整理にあたっては、調査補助員として下記の参加協力を得た。

藤田 昌宏、高瀬 隆治、坂本 美紀、吉田 和美、若林 純也、島田 裕弘
林 慎吾、西井 貞善、仁王 浩司、西澤 泰枝、佃 論佳、佐藤 智生
杉本亜澄美、森木 芳子、峯松 皓代、田中 良子、大戸井和江、高橋 公子
西坂 泰子、多田みちる
- 4 本書の作成・編集は、茨木市立文化財資料館長井上耕三、主査奥井哲秀の指導のもとに、濱野がこれにあたった。出土遺物の実測を濱野・佐藤、各種図面の浄書は濱野・佃、遺構・遺物の写真及び本文執筆と全体の編集については濱野が担当した。
- 5 現地調査及び内業整理にあたっては、下記の方々から種々のご協力、ご指導、ご教示を賜った。

免山 篤（茨木市文化財研究調査会委員）、森岡 秀人（芦屋市教育委員会）、森田 克行（高槻市埋蔵文化財センター）、橋本 久和（高槻市埋蔵文化財センター）、古川 久雄（六甲山麓遺跡調査会）、秋山 浩三、岡本 圭司（大阪府文化財調査研究センター）、酒井 泰子（大阪府教育委員会）、久家 隆芳（高知県文化財団埋蔵文化財センター）、永野 香（奈良大学考古学研究室OG）、藤田 明弘（花園大学考古学研究会OB）
- 6 本書に使用した地図は、『茨木市都市計画図-1/2,500・1/20,000』である。また、各遺跡の地区割は、調査区にあわせて任意に設定した。また、標高はT・P（東京湾標準高）を使用している。

本文目次

序文 例言

第1章 位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
旧石器時代	1
縄文時代	2
弥生時代	2
古墳時代	2
奈良時代	4
平安・鎌倉・室町時代～近世時代	4
第2章 目垣遺跡の発掘調査	7
第1節 調査に至る経緯と経過	7
第2節 検出遺構と出土遺物	8
第3節 まとめ	19
第3章 耳原遺跡の発掘調査	20
第1節 調査に至る経緯と経過	20
第2節 検出遺構と出土遺物	22
第3節 まとめ	32
第4章 総持寺北遺跡の発掘調査（S J - N • 95-1、S J - N • 96-1）	33
第1節 調査に至る経緯と経過	33
第2節 検出遺構と出土遺物	34
第3節 まとめ	45
第5章 春日遺跡の発掘調査（K S • 95-2、K S • 95-3）	46
第1節 調査に至る経緯と経過	46
第2節 検出遺構と出土遺物	48
第3節 まとめ	59
第6章 安威遺跡の発掘調査	60
第1節 調査に至る経緯と経過	60
第2節 検出遺構と出土遺物	63
第3節 まとめ	68

卷頭カラー図版目次

卷頭図版 I (上) 目垣遺跡 S E -04 検出状況 (東から)

(下) 目垣遺跡 S E -02 検出状況 (東から)

卷頭図版 II (上) 耳原遺跡調査地西半部全景 (東から)

(下) 耳原遺跡調査地東半部全景 (東から)

卷頭図版 III 総持寺北遺跡 (S J - N • 95-1) 調査地全景 (西から)

卷頭図版 IV (上) 総持寺北遺跡 (S J - N • 95-1) SK-12 遺物出土状況 (東から)

(下) 総持寺北遺跡 (S J - N • 96-1) 調査地全景 (南から)

卷頭図版 V (上) 春日遺跡 (KS • 95-2) 調査地全景 (南から)

(下) 春日遺跡 (KS • 95-2) SD-04 須恵器検出状況 (南から)

卷頭図版 VI (上) 春日遺跡 (KS • 95-3) 調査地北半部全景 (南から)

(下) 春日遺跡 (KS • 95-3) 1号墳検出状況 (南西から)

卷頭図版 VII (上) 春日遺跡 (KS • 95-3) 1号墳周溝内断面 (西から)

(下) 春日遺跡 (KS • 95-3) 1号墳周溝内蓄形埴輪の立飾り検出状況

(南から)

卷頭図版 VIII (上) 安威遺跡調査地全景 (南から)

(下) 安威遺跡自然河道内弥生時代後期器台検出状況 (東から)

挿 図 目 次

- 第1図 茨木市位置図
第2図 周辺遺跡分布図
第3図 目垣遺跡発掘調査位置図
第4図 目垣遺跡遺構平面図
第5図 目垣遺跡 S E - 04出土土器実測図（1）
第6図 目垣遺跡 S E - 04出土土器実測図（2）
第7図 目垣遺跡 S E - 04出土土器実測図（3）
第8図 目垣遺跡 S E - 01他出土遺物実測図（4）
第9図 目垣遺跡 S D - 02他出土土器実測図（5）
第10図 目垣遺跡包含層出土土器実測図（6）
第11図 目垣遺跡 S D - 01出土錢貨
第12図 耳原遺跡発掘調査位置図
第13図 耳原遺跡遺構平面図
第14図 耳原遺跡落ち込み出土土器実測図（1）
第15図 耳原遺跡落ち込み出土土器実測図（2）
第16図 耳原遺跡落ち込み出土土器実測図（3）
第17図 耳原遺跡落ち込み出土土器実測図（4）
第18図 耳原遺跡落ち込み他出土土器実測図（5）
第19図 耳原遺跡落ち込み出土石器実測図（6）
第20図 總持寺北遺跡発掘調査位置図
第21図 總持寺北遺跡（S J - N • 95 - 1）遺構平面図
第22図 總持寺北遺跡（S J - N • 95 - 1）SK - 12土器・集石遺構出土状況図
第23図 總持寺北遺跡（S J - N • 96 - 1）遺構平面図
第24図 總持寺北遺跡（S J - N • 95 - 1）出土土器他実測図（1）
第25図 總持寺北遺跡（S J - N • 95 - 1）出土土器実測図（2）
第26図 總持寺北遺跡（S J - N • 95 - 1）出土瓦実測図（3）
第27図 總持寺北遺跡（S J - N • 95 - 1）出土石器実測図（4）
第28図 春日遺跡発掘調査位置図
第29図 春日遺跡（K S • 95 - 2）遺構平面図
第30図 春日遺跡（K S • 95 - 2）出土土器実測図
第31図 春日遺跡（K S • 95 - 3）遺構平面図
第32図 春日遺跡（K S • 95 - 3）出土遺物実測図（1）
第33図 春日遺跡（K S • 95 - 3）出土遺物実測図（2）
第34図 安威遺跡発掘調査位置図
第35図 安威遺跡遺構平面図
第36図 安威遺跡出土土器実測図（1）
第37図 安威遺跡出土土器実測図（2）
第38図 安威遺跡出土土器実測図（3）

図版目次

- 図版 1 目垣遺跡調査地全景（南から）
図版 2 (上) 目垣遺跡 S E - 02上面検出状況（北東から）
(下) 目垣遺跡 S E - 02下面検出状況（西から）
図版 3 (上) 目垣遺跡 S E - 04直上瓦器・土師皿検出状況（東から）
(下) 目垣遺跡 S E - 04検出状況（東から）
図版 4 耳原遺跡調査地全景（東から）
図版 5 (上) 耳原遺跡調査地東半部全景（西から）
図版 6 (下) 耳原遺跡西半部全景（東から）
図版 6 (上) 總持寺北遺跡 (S J - N • 95-1) 調査地東半部全景（西から）
(下) 總持寺北遺跡 (S J - N • 95-1) 調査地西半部全景（西から）
図版 7 (上) 總持寺北遺跡 (S J - N • 95-1) SB - 01検出状況（南から）
(下) 總持寺北遺跡 (S J - N • 95-1) SB - 02検出状況（南から）
図版 8 (上) 總持寺北遺跡 (S J - N • 95-1) SK - 12遺物出土状況（東から）
(下) 總持寺北遺跡 (S J - N • 95-1) SK - 12遺物出土状況（北から）
図版 9 (上) 總持寺北遺跡 (S J - N • 96-1) 調査地全景（南から）
(下) 總持寺北遺跡 (S J - N • 96-1) SD - 01他検出状況（北から）
図版10 (上) 春日遺跡 (K S • 95-2) 調査地全景（南から）
(下) 春日遺跡 (K S • 95-2) SD - 04須恵器坏身検出状況（南から）
図版11 (上) 春日遺跡 (K S • 95-3) 調査地全景（南から）
(下) 春日遺跡 (K S • 95-3) 1号墳全景（南から）
図版12 (上) 春日遺跡 (K S • 95-3) 1号墳周溝西半部全景（南から）
(下) 春日遺跡 (K S • 95-3) 1号墳周溝西半部全景（南東から）
図版13 (上) 春日遺跡 (K S • 95-3) 1号墳周溝内断面（西から）
(下) 春日遺跡 (K S • 95-3) 1号墳周溝内蓋形埴輪の立飾り検出状況（西から）
図版14 (上) 春日遺跡 (K S • 95-3) 1号墳周溝内出土杯蓋検出状況（南から）
(下) 春日遺跡 (K S • 95-3) 1号墳周溝内出土杯身検出状況（南から）
図版15 (上) 安威遺跡 (A I • 96-1) 調査地全景（南から）
(下) 安威遺跡 (A I • 96-1) 自然河道内弥生時代後期台検出状況（南から）
図版16 目垣遺跡 (MG • 93-1) 出土土器 - I
図版17 目垣遺跡 (MG • 93-1) 出土土器 - II
図版18 目垣遺跡 (MG • 93-1) 出土土器 - III
図版19 目垣遺跡 (MG • 93-1) 出土土器 - IV
図版20 耳原遺跡 (MH • 94-1) 出土土器 - I
図版21 耳原遺跡 (MH • 94-1) 出土土器 - II
図版22 耳原遺跡 (MH • 94-1) 出土土器 - III
図版23 總持寺北遺跡 (S J - N • 95-1) 出土土器 - I
図版24 總持寺北遺跡 (S J - N • 95-1) 出土土器 - II
図版25 春日遺跡 (K S • 95-2 • 95-3) 出土土器
図版26 春日遺跡 (K S • 95-3) 出土土器 - II
図版27 安威遺跡 (A I • 96-1) 出土土器 - I
図版28 安威遺跡 (A I • 96-1) 出土土器 - II
図版29 安威遺跡 (A I • 96-1) 出土土器 - III

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境（第1図・第2図）

茨木市は大阪府の北東部にあり、南北に長く面積は、76.51km²、人口は257,000人で三島地域の中核都市として発展している。京都・大阪・神戸を結ぶ東海道の一端に位置する大阪の衛星都市のひとつである。

周辺の市町としては、東に高槻市、南と南西に摂津市と吹田市、西と北西に箕面市と豊能町に隣接するとともに、北は京都府亀岡市に接している。

茨木市の地理的特徴は、大きく見て市域の北半分は、山地・丘陵部と南半分は平野部に大別でき、その間に真上断層が、東西に延びている。

北半分の山地は丹波高原の南端にあたり、標高300m前後の緩やかな隆起が準平原を形成しており、北摂山地と呼ばれている。これを形成している主な地層及び岩石は、丹波帯とよばれる古生層に属するチャートや砂岩、泥質岩や輝緑凝灰岩といった古い時代のものである。

北摂山地の裾部にかけては、砂礫や粘土で構成している大阪層群からなる丘陵地帯、低位段丘が発達している。また、西には前期洪積層の隆起地形である標高50～100m前後の千里丘陵がある。南半分の平野は、淀川及び安威川・佐保川・勝尾寺川・元茨木川（現在廃川）などの市内を流れる主要河川によって形成された扇状地及び沖積平野が広がり、三島平野を形成している。

第2節 歴史的環境（第2図）

近年、茨木市を含む北摂地域一帯の埋蔵文化財調査例が増加し、新しい考古学的知見が相次いでいる。歴史的環境の記述も最近の考古学的知見を取り入れながら、今後の調査の参考になるよう述べていく。

旧石器時代の遺跡は、内容的には不明な点が多いが山麓部の初田遺跡、丘陵部裾の太田遺跡・耳原遺跡・郡遺跡等で表面採集や後世の遺物包含層から、ナイフ形石器・有舌尖頭器が単独又は



第1図 茨木市位置図

数点発見されている。また、近年、沖積地に立地する東奈良遺跡や新庄遺跡においてもナイフ形石器が数点発見されている。

縄文時代の代表的な遺跡としては、耳原遺跡が知られており、縄文時代後期から晩期にかけての遺構や遺物が検出されている。過去の調査では、晩期の滋賀里Ⅲ式期から長原式期までの壺（深鉢）棺墓が16基検出されている。また、安威川右岸の牟礼遺跡では、自然流路及び井堀・水田が検出され自然流路から若干の晩期（滋賀里Ⅲ式～Ⅳ式・船橋式もしくは長原式）の縄文土器が出土している。他に山麓部の初田遺跡や西福井遺跡・太田遺跡でも縄文土器が、東奈良遺跡においては、前期末（大歳山式）爪形文（C字）土器や晩期後半（大洞AないしA'式）の浮線文土器と石棒が、また、郡遺跡畠田地区において後期から晩期にかけての所産と思われる石刀が後世の遺物包含層から出土しており、今後、縄文土器が出土する可能性が高いと思われる。最近の発掘調査の茨木市域の縄文時代の成果としては、東奈良遺跡と新庄遺跡で晩期後半の船橋式と長原式の深鉢片が出土している。また、総持寺遺跡（S J・95-1 地点）において、自然の落ち込みから晩期の滋賀里Ⅲb式期から船橋式期までの壺（深鉢）を中心とする甕（深鉢）棺墓と思われる土器群が検出されている。

弥生時代にはいると、北摂地域において前期前半には東奈良遺跡・目垣遺跡が形成され、前期末には耳原遺跡及び郡遺跡にも集落の形成が見られる。

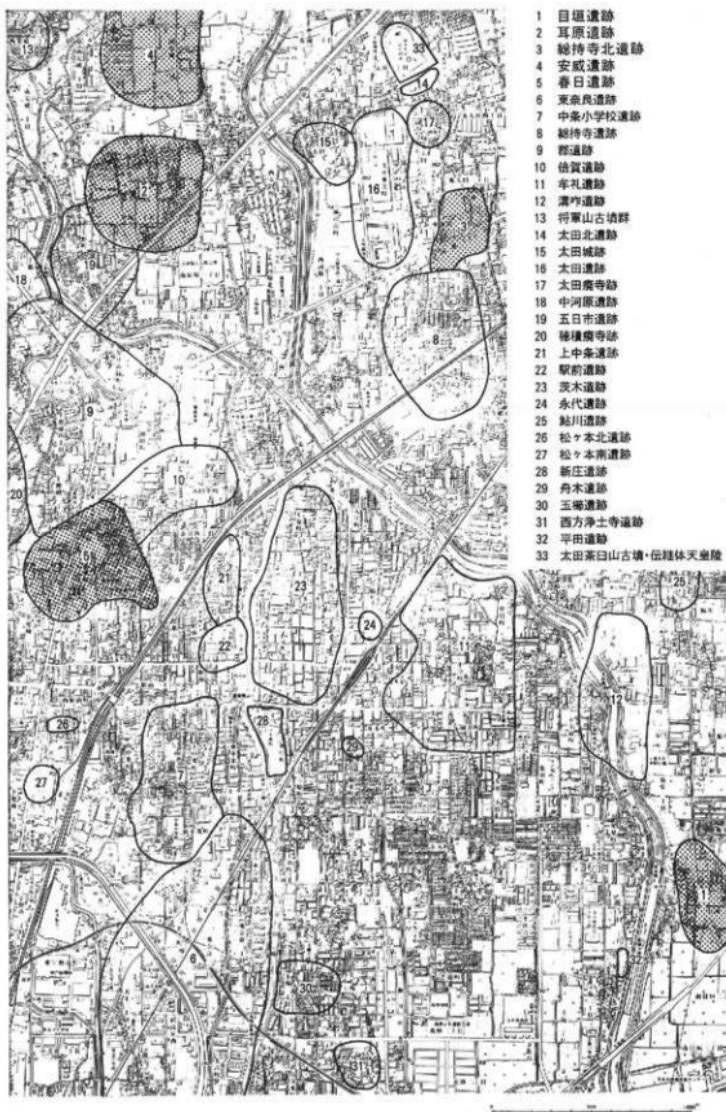
特に東奈良遺跡は、高槻市安満遺跡と同じく、淀川中流域における拠点的集落であり、中期後半には、銅鐸鋳型等の発見により、青銅器生産をしていたことが判明している。

中期及び後期になると、市内の主要河川の両側及び丘陵部や山間部に新たな集落を形成するため遺跡数が急激に増加する。更に、東奈良遺跡や郡遺跡などの拠点集落では、集落規模が大きくなり、近くに分村した遺跡も現れる。

新たに集落を形成する遺跡としては、見付山遺跡・春日遺跡・太田遺跡・溝呬遺跡や、高地性集落である石堂ヶ丘遺跡などがあり、東奈良遺跡の分村として成立したと思われるものに、中条小学校遺跡、そして郡遺跡の分村として中河原遺跡・倍賀遺跡などがある。

最近の発掘調査の弥生時代の成果としては、前期前半に東奈良遺跡・目垣遺跡以外に新庄遺跡及び総持寺遺跡（S J・95-1 地点）における集落の形成が判明したことである。特に、総持寺遺跡（S J・95-1 地点）から検出された弥生時代前期前半の塗棺は、北摂地域に限定すると今の所、最古の弥生土器と考えられる。玉櫛遺跡において新たに弥生時代中期の遺構と遺物が検出され、溝呬遺跡については弥生時代後期初頭の遺構と遺物、そして今回、報告する安威遺跡においても弥生時代後期前半から中頃の遺物が検出されている。

古墳時代の遺跡としては、北部の山麓部と千里丘陵の裾部に多くの古墳が築造される。前期古墳としては、紫金山古墳及び將軍山古墳が相次いで丘陵部に築造される。両古墳とも全長約100m程の前方後円墳で、後円部中央には竪穴式石室がある。後円部の竪穴式石室には断面U字形の粘土棺床をそなえ割竹形木棺があったと推定されている。紫金山古墳の竪穴式石室からは、12面の鏡の他、貝製の錐形石・車輪石・筒形銅器等の多種多様な副葬品が出土している。続いて前期



第2図 周辺遺跡分布図

末には直径約10mの円墳である安威0号墳及び全長約45m程の前方後円墳の安威1号墳が築造される。両古墳とも、割竹形木棺をいれた粘土櫛が2基検出されている。

中期にはいると、全長226m・後円部径138mの前方後円墳である、太田茶臼山古墳（伝繼体天皇陵）が築造される。更に、最近の発掘調査の結果、太田茶臼山古墳（伝繼体天皇陵）に先行して築造されたことが判明した太田石山古墳がある。

後期にはいると、市内では最も早く横穴式石室を導入した青松塚古墳を初めとして南塚古墳、海北塚古墳が築造される。そして山麓部を中心に横穴式石室を主体とする、新屋古墳群・安威古墳群・將軍山古墳群・長ヶ淵古墳群などの群集墳が出現する。大形単独墳である耳原古墳やカマド塚である上寺山古墳、後期末から終末期にかけての初田古墳・阿武山古墳も築造されている。

最近の調査では、平野部の駅前遺跡・郡遺跡そして段丘上に立地する總持寺遺跡などで、5世紀後半から6世紀前半に築造され、後世に墳丘部を削平されたいわゆる埋没墳が多数見つかっている。特徴として、円墳か方墳であり主体部は、横穴式石室の痕跡が認められないため木棺直葬と考えられている。今回、報告する春日遺跡においても埋没墳が検出され、上記、駅前遺跡・郡遺跡・總持寺遺跡とほぼ同時期の築造で、後期群集墳に先行する木棺直葬墳墓群と考えられている。

古墳時代の集落跡としては、弥生時代から引き続いて存続する郡遺跡・倍賀遺跡・宿久庄遺跡・中条小学校遺跡などがある。特に東奈良遺跡では、前期初頭にかけて再び集落規模が大きくなり、幅7~10mの大溝が掘られたり、多くの他地域の搬入土器が出土している。新たに成立した集落遺跡としては、上中条遺跡などがある。

奈良時代（律令時代）に入ると、茨木市を含め北摂地域は、嶋上郡・嶋下郡・豊嶋郡の3郡に分れ、茨木市域は嶋下郡に属するようになる。嶋下郡は、新屋・宿人（久）・安威・穂積の4郷からなり、嶋下郡衙は、旧山陽道（西国街道）沿いの郡あるいは郡山周辺地域にあったと推定されている。最近の発掘調査では、奈良から平安時代にかけての掘立柱建物跡などが検出され、今後、郡遺跡周辺において嶋下郡衙が発見される可能性が高い。

また、この頃に当地域を統率していた有力氏族の寺院として、飛鳥時代末期から奈良時代かけて創建された太田庵寺・穂積庵寺がある。特に太田庵寺からは、塔婆心礎及び舍利容器一具、そして複子葉弁文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦などが出土している。その他に安威の大織冠山から單獨で凝灰岩製の石櫃から三彩釉有蓋壺の藏骨器が発見されており、平安時代前期に入ると、忍頂寺と總持寺が相次いで建立された。

北摂地域は、古くから藤原氏の勢力の強い土地で、平安時代に入ると、茨木市域の多くは、摂関家の藤原氏の莊園であったことが文献から知られている。しかし、中世になると藤原氏の勢力が衰え、変わって莊園領主は、氏神・氏寺であった春日大社や興福寺に移り、両寺による莊園支配が、室町時代（15世紀中頃）まで続いていることが文献資料から判明している。

この事を裏付けるように最近、発掘調査が実施された玉櫛遺跡において、検出した堀に開まれた屋敷跡が莊園支配層の存在を考古学的にも裏付ける一例となった。

新発見の遺跡として舟木遺跡があり、平安時代後期（11世紀中頃）の集落跡が検出され、舟木遺跡に隣接している新庄遺跡においても、平安時代（9～12世紀）の河川や掘立柱建物跡や小型滑石製地鎮具が検出されている。

新庄遺跡で縁釉陶器や越州窯系青磁が出土しているが、後者は一般集落跡からあまり出土せず、国府・郡衙・寺院などの公的施設跡か、平安京などの都城などから出土するのが通例で、茨木市域では郡遺跡について2例目となった。宿久庄遺跡においては、9世紀後半から10世紀頃にかけての掘立柱建物跡と13世紀後半から末葉にかけての2時期にわたる掘立柱建物跡が、絶持寺遺跡においては飛鳥時代の竪穴住居跡、奈良・平安時代の掘立柱建物群や鎌倉時代の溝で区画された掘立柱建物数棟と井戸・土壙墓（屋敷墓）で構成された屋敷跡が検出されている。

そのほか、郡遺跡・溝柵遺跡・東奈良遺跡などでも平安時代から中世にかけての掘立柱建物跡や井戸そして水田跡等集落の存在を予見させる遺構が検出されているが、点的調査のため集落構造が判明するまでには至っておらず今後、中世集落の発掘事例が増加することに期待したい。

上記、莊園などの集落遺跡以外の遺構や遺物としては、茨木市の北部の山間部にクルス山中世墓地や伏原中世墓地、また、忍頂寺や八幡神社の五輪塔や佐保の石槽（岩風呂）などの鎌倉時代後半から室町時代前半の中世石造品が点在している。

中世から近世初頭を通じて、山間部には泉原城や佐保城などの山城、平野部には、茨木川左岸に茨木地域の中核的な城として茨木城がある。茨木城は戦国時代、中川清秀・片桐且元の本城として特に有名で、茨木城の西に位置する北摂地域の主要な有岡城（伊丹城）・池田城や北の芥川城・高槻城と同様に近世初頭には結構の繩張りをした城郭と知られている。

しかしながら、元和元年（1616年）の一国一城令により廢城になって以後は、最近、茨木城の結構の範囲の部分で発掘調査を実施し茨木城の外郭の堀を検出したが、中心部付近は全く調査されていないため、茨木城の正確な位置と繩張りについても確実には解っておらず、現在も幻の城となっており、今後の発掘調査の成果を期待するところである。

参考文献

1. 茨木市史
2. 大阪府史・第1巻古代編I
3. 東奈良遺跡調査会『東奈良、発掘調査概報I・II』1979年・1981年
4. 茨木市教育委員会『昭和60年度～平成元年度発掘調査概報I・II』
5. 茨木市教育委員会『平成2年度発掘調査概報』
6. 茨木市教育委員会『平成3年度発掘調査概報』
7. 茨木市教育委員会『倍賀遺跡発掘調査概要報告書－平成4年度発掘調査概報－』
8. 茨木市教育委員会『葦分神社東方遺跡発掘調査概要報告書－平成6年度発掘調査概報II－』
9. 茨木市教育委員会『平成7年度発掘調査概報』

10. 茨木市教育委員会『わがまち茨木－城郭編・古墳編一』
11. 茨木市教育委員会『茨木の歴史と文化遺産』1986年
12. 茨木市教育委員会『茨木の史跡』1983年
13. 大阪府教育委員会『東奈良遺跡発掘調査概要Ⅰ・Ⅱ』1976年・1989年
14. 大阪府教育委員会『玉櫛遺跡発掘調査概要』1992年
15. 大阪府教育委員会『総持寺遺跡発掘調査概要』1995年
16. 大阪府教育委員会『新庄遺跡発掘調査概要』1995年
17. 大阪府教育委員会『新庄遺跡発掘調査概要』1995年
18. 大阪府教育委員会『東奈良Ⅲ・郡遺跡発掘調査概要Ⅲ』1996年
19. ~~助~~ 大阪府埋蔵文化財協会『東奈良遺跡』1995年
20. ~~助~~ 大阪府文化財調査研究センター『栗生岩阪遺跡』1996年
21. ~~助~~ 大阪府文化財調査研究センター『溝呂遺跡現地説明会資料』1995年12・9
22. ~~助~~ 大阪府文化財調査研究センター『玉櫛遺跡現地説明会資料』1995年12・9
23. 名神高速道路内遺跡調査会『茨木市耳原遺跡の発掘調査』
- 第32回大阪府下埋蔵文化財研究会
24. 寺沢薰・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年（近畿編Ⅱ）』
森田克行「摂津地域」

第2章 目垣遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 所在地 大阪府茨木市目垣2丁目10番1, 11番

2. 調査面積 約200m²

3. 調査原因 共同住宅建設

4. 目垣遺跡の既往の調査と調査に至る経過

目垣遺跡は、茨木市目垣3丁目を中心と広がる弥生時代前期からの遺跡で標高3~4mの沖積地に立地する遺跡である。昭和48年に関西電力の高圧線の鉄塔設置に伴う基礎工事によって土器が出土し、確認調査が実施されている。確認調査は地表下1.6mの黒色粘土層の遺物包含層を検出し、この層より弥生時代前期から中期にかけての土器・石器が出土した。しかし、当該地は低地部のため、地下水の湧水が多く弥生時代前期から中期にかけての遺構は見られず、また、調査範囲が鉄塔設置部分に限られていたため遺跡の範囲等はつかめなかった。

安威川中流部の東岸周辺は、從来から遺跡の存在が稀薄な所で、今回の発掘調査以前は前記の調査以外は小規模な調査等が実施されているが本格的な調査例は少なかった。特に目垣遺跡は東奈良遺跡とともに弥生時代前期初頭の北摂地域における集落形成について拠点になる可能性が高く、低湿地部に立地していることにより遺物の残存状態も良く、今後の調査に期待がもてる遺跡



第3図 目垣遺跡 発掘調査位置図

として考えられている。

平成5年4月に茨木市目垣1丁目において共同住宅建設が計画された。当該地は前述の通り周知の埋蔵文化財包蔵地の目垣遺跡にあたり、弥生時代前期から中期の遺構と遺物の存在が予想された。このため、埋蔵文化財確認依頼に基づき共同住宅建設予定地内において試掘調査を実施した結果、弥生時代前期から中期の遺構と遺物は検出されず、中世の瓦器・土師器片を含む遺物包含層を確認した。この試掘調査の結果をもとに依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、平成5年11月25日より本格的な発掘調査を実施することとした。本調査は、上記、遺物包含層を損傷する共同住宅建築部分を中心に南北のトレンチを設定した。

5. 調査の方法

調査にあたっては、協議の結果、共同住宅建設予定地を中心に、南北のトレンチを設定した。調査は、現地表下約1mまでの分厚い盛土層と旧耕作土・床土層は重機で掘り下げ、以下は人力掘削及び精査を実施した。

また、調査にあたっては調査区に合せた任意の地区割を設定し、遺物取上げ及び測量のため4m×4mグリッドで調査をすすめた。

第2節 検出遺構と遺物

1. 基本層序

調査区において普遍的に見られる下記の6層を基本層序とした。以下各層について概説する。

第1層 盛 土

第2層 旧耕作土

第3層 床 土

第4層 暗茶褐色シルト層（中世遺物包含層層Ⅰ）

第5層 黄灰色シルト層（中世遺物包含層Ⅱ）

第6層 茶灰褐色シルト層（中世遺物包含層層Ⅲ）

第7層 緑褐色シルト層（無遺物層・地山層）

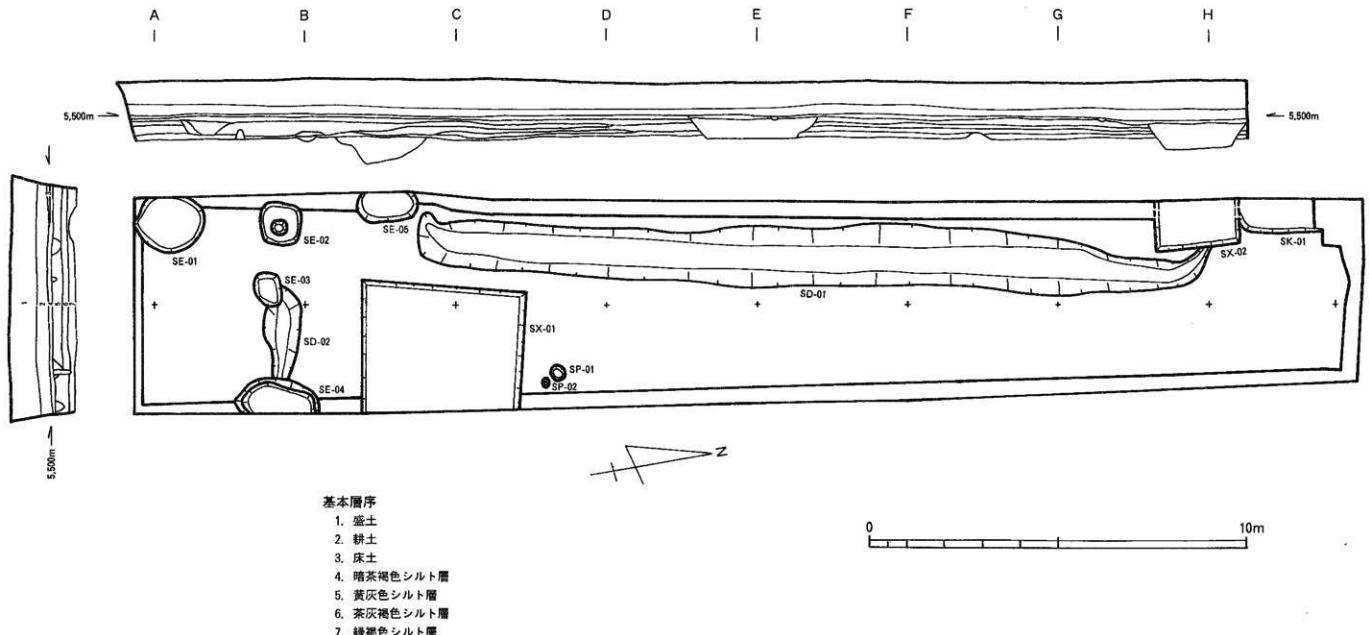
2. 遺構と遺物

今回の調査の結果、地山層の緑褐色シルト層直上において中世の井戸4基、土壙2基、柱穴2基、溝2条そして近世の方形の掘り込みを検出した。以下、中世の井戸の検出状況を中心に各遺構と出土遺物について概説する。

検出遺構

SE-01

調査区の南西端において検出した中世の素掘りの井戸である。検出幅は長軸1m90cm、短軸1m60cmの橢円形を呈する。井戸埋土は淡黒色粘土で深さは平均75cmを測る。



第4図 目塙遺跡 遺構平面図

S E -02

調査区の南西部において検出した中世の井戸枠のある井戸である。検出幅は長軸1m20cm、短軸1mの楕円形を呈する。井戸埋土は黒灰色粘土で深さは平均67cmを測る。

S E -03

調査区の南部中央において検出した中世の素掘りの井戸である。検出幅は長軸80cm、短軸72cmの楕円形を呈する。井戸埋土は灰色粘土で深さは平均60cmを測る。

S E -04

調査区の南部中央において検出した中世の素掘りの井戸である。検出幅は長軸1m30cm、短軸1m15cmの楕円形を呈する。井戸埋土は淡黒色粘土で深さは平均60cmを測る。

S E -05

調査区の南部中央において検出した中世の素掘りの井戸である。検出幅は長軸1m40cm、短軸1m10cmの楕円形を呈する。井戸埋土は、淡灰色粘土で深さは平均64cmを測る。

S D -01

調査区の南部でとぎれる南北溝で、最大幅1m40cm、深さ平均78cmを測る。溝埋土は淡灰色粘土である。溝の埋土中から土師皿・羽釜・丹波焼壺及び開元通寶・嘉祐通寶が出土している。

出土遺物（第5図～第11図・1～77）

出土遺物は、井戸及び遺物包含層からの出土が中心で、特にS E -04からは和泉型瓦器碗と楠葉型瓦器碗が共伴状態で検出されている。これらは一括して取り上げたため、ある程度時期幅があるが、造構としての出土量が多い。以下、S E -04を中心に記述していく。

S E -04出土遺物（第5図-1、第6図-2～19、第7図-20～39）

(1)は、東播系須恵器の大型壺と思われる。復元口径50.8cmを測る。短く外反する口縁部。体部外面は粗い叩きを施し内面はナデ調整を施す。(2)は白磁碗である。口縁部内面は口剥げとなっている。(3)～(19)は楠葉型瓦器碗及び和泉型瓦器碗である。器高がやや高く、高台が残り、内面のヘラミガキがしっかり残るタイプと、高台が消失し内面のヘラミガキがほとんど残らないタイプに分けられる。両者の型式差の違いは、湧水の激しい井戸内の埋土を上層と下層に細かく分別して取り上げられなかったためにおきた混入と考えられる。

(20)～(31)は土師器の皿である。口径が7cmから10cm前後の小型の皿から口径が11cmを越える大型の皿まで出土している。また、(29)～(31)は底部中央がやや凹み気味となっている。(32)は白磁皿である。口縁端部は外反し、見込み部に1本沈線が巡る。底部外面は露胎である。(33)は、褐釉壺である。口縁部は玉縁状を呈し、体部上半に沈線が間隔をおいて巡る。(34)は瓦質の三足鍋である。丸味のある体部に水平に鈎が付き、鈎の根元から足が3本付いていたはずだが途中から3本とも欠損している。内外面に多量の煤と炭化物が付着している。口径17.2cmを測る。(35)は瓦質の羽釜である。口縁部はやや内傾し、鈎は水平に付く。内外面ともナデ調整

を施す。(36)～(38)は、東播系須恵器の捏鉢の口縁部と底部片であり、底部外面には糸切り痕を残す。(39)は須恵質の鉢である。外面のみ施釉する。

S E - 01出土遺物（第8図-40～42）

(40)は備前焼の壺の底部である。復元底径36.4cmを測る。(41)は和泉型瓦器塊である。内面には細かいヘラミガキ、外面にもヘラミガキを施す。(42)は土師器の皿である。口縁部外面はヨコナデ、内面は細かい刷毛目調整後ナデ調整を施す。

S E - 02出土遺物（第8図-43）

(43)は井戸枠に使用されていた曲物である。材質は檜の薄板で各板は桜の皮で綴じる。底板はなく、井戸枠に埋置する時に取り外したものと思われる。

S E - 05出土遺物（第8図-44～45）

(44)は土師器の皿である。復元口径10.4cmを測る。(45)は和泉型瓦器塊である。退化した高台が付く。

S D - 01出土遺物（第8図-46～49）

(46～47)は土師器の皿である。(48)は瓦質の羽釜で口縁部は直立する。復元口径28.2cmを測る。(49)は丹波焼の壺である。直線的にのびる体部から頸部は短く外反し、口縁端部は面を持つ。口縁内面に沈線を施す。復元口径34.2cmを測る。

S D - 02出土遺物（第9図-50～51）

(50)は土師質の壺である。(51)は和泉型瓦器塊で退化した高台が付き、内面には平行線と渦巻状の粗いヘラミガキを施す。

S X - 01出土遺物（第9図-52）

(52)は和泉型瓦器塊である。全体的に摩滅が著しい。

S K - 01出土遺物（第9図-53）

(53)は土師質の羽釜である。復元口径37.6cmを測る。

遺構面直上包含層出土遺物（第9図-54、60）

(54)は楠葉型瓦器塊である。高台は消失し丸底を呈する。内面には形骸化したヘラミガキを施す。(60)は土師器の小皿である。口縁部に横ナデ調整を施し、底部には指頭圧痕が残る。

遺物包含層出土遺物（第9図-55～59、61～72、第10図-73～74）

(55)は楠葉型瓦器塊である。口縁部内面の沈線は消失しており、退化した高台が付く。内面には形骸化したヘラミガキを施す。(56)は和泉型瓦器塊である。器高は低く退化した高台が付く。内面には形骸化したヘラミガキを施す。(57)は楠葉型瓦器塊である。しっかりとした高台が付き、器高は高い。口縁部内面には沈線を一条施す。内面には細かいヘラミガキを施す。(58～67)は、土師器の皿である。(58)は小型のヘソ皿である。(59)もややヘソ皿傾向の土師皿である。(61)は「て」の字状口縁が退化した土師皿である。(68)は、高台付土師皿の脚部である。(69)は白磁碗の底部である。高台部分は露胎となっている。(70)は小さな鈎が付いた土師質の羽釜である。(71～72)は東播系須恵器の捏鉢である。

(73～74) は土師質の壙である。(73) は外面は粗いタタキ、内面は細かい横ハケを施す。(74) は木製落とし蓋を受けられるようになった受け口状口縁部を呈している。

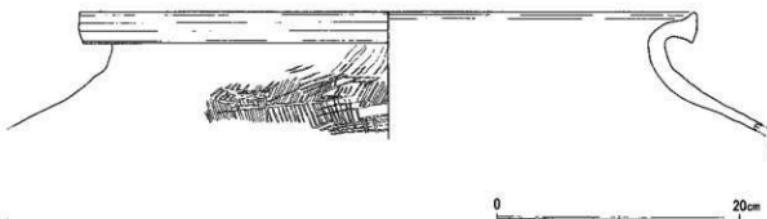
S D - 01出土の出土銭貨（第11図-75～76）

(75) は開元通寶である。背文に月を鋤ている。唐錢で初鋤年は621年である。^{註1)} (76) は嘉祐通寶である。銭文の書体は真書である。北宋錢で初鋤年は1056年である。^{註1)}

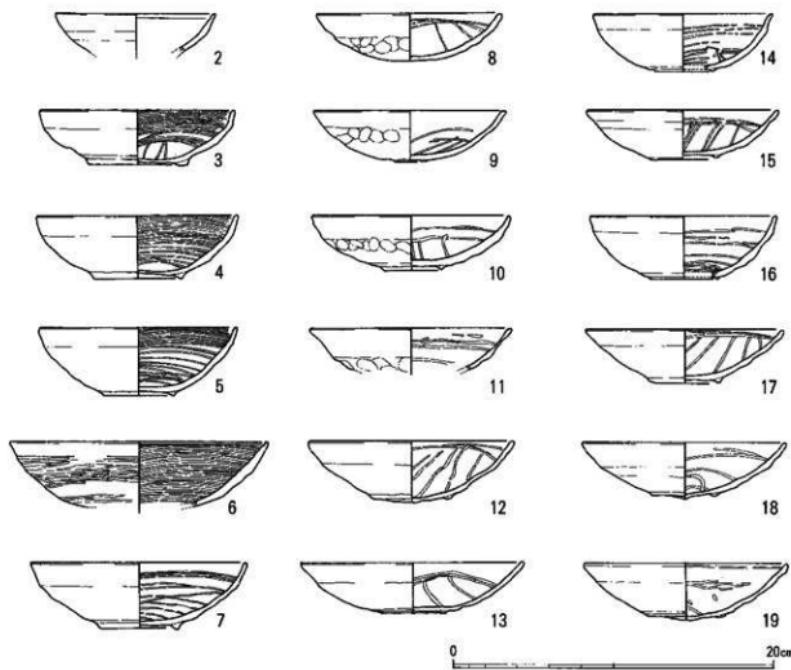
遺物包含層出土の出土銭貨（第11図-77）

(77) は摩滅と変形が著しいため銭の文字は「通」と「寶」の字以外判読できない。背面には別の錢貨の一部が付着している。

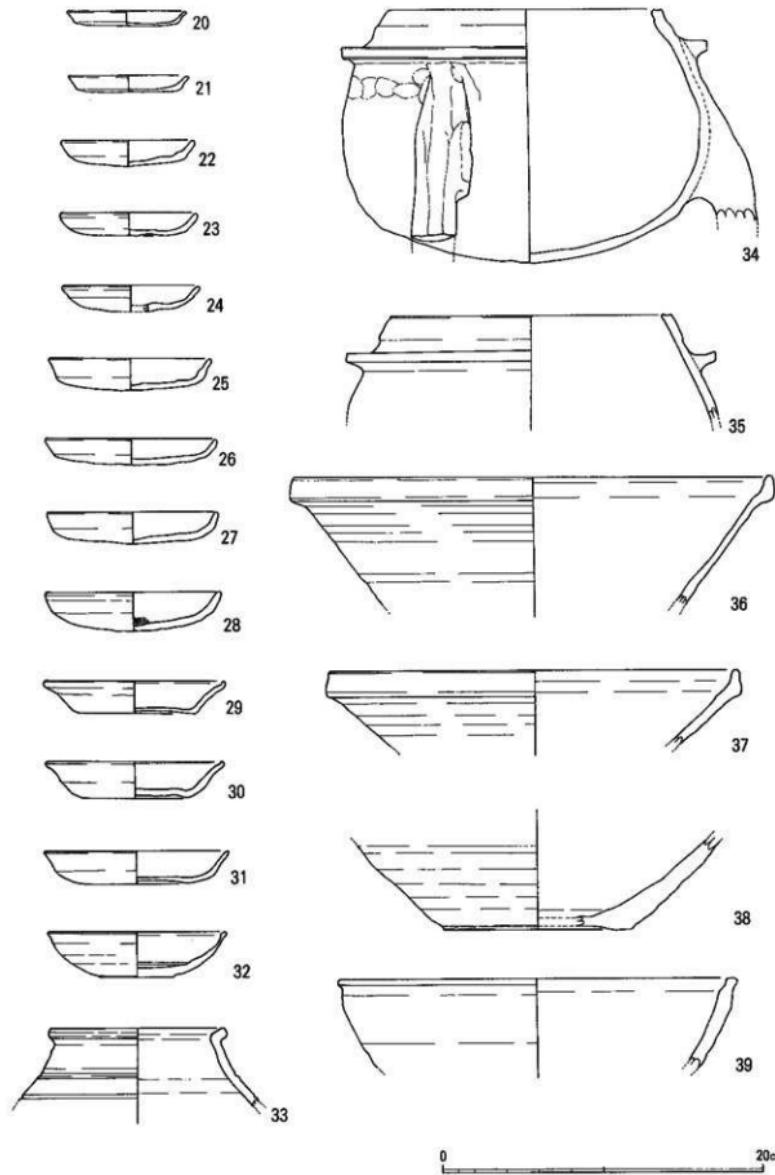
註1) 永井久美男『日本出土銭総覧1996年版』 兵庫埋蔵銭調査会



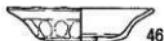
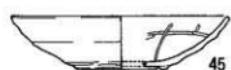
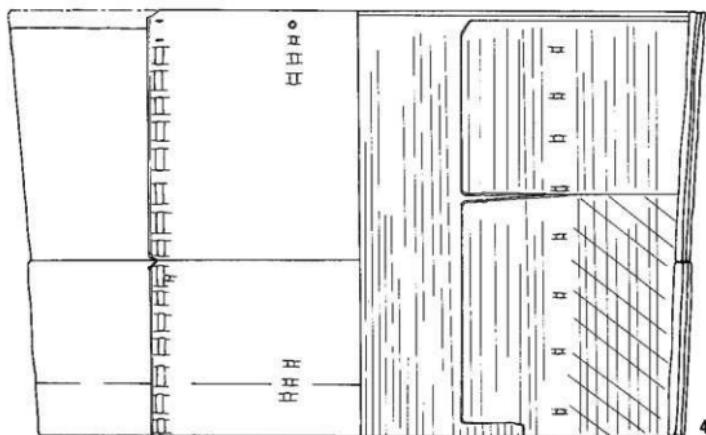
第5図 目垣遺跡SE-04 出土土器実測図(1)



第6図 目垣遺跡 SE-04 出土土器実測図(2)

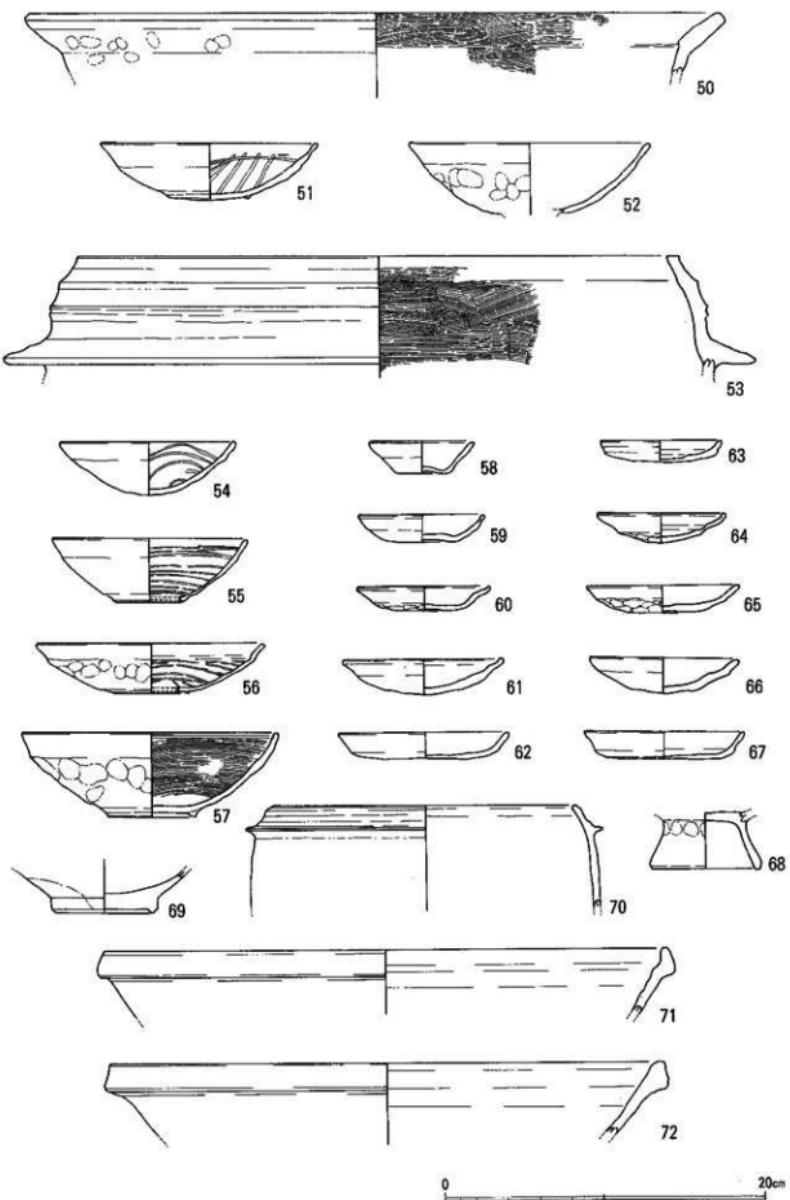


第7図 目垣遺跡 SE-04 出土土器実測図(3)

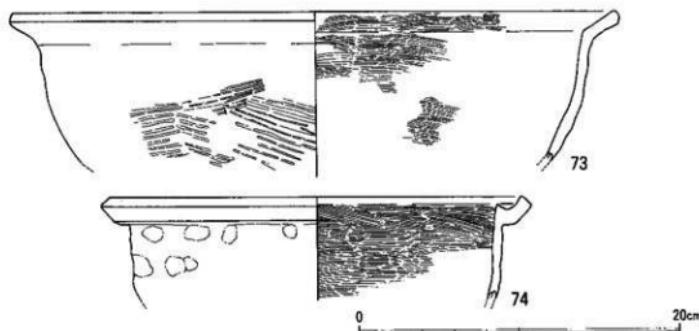


0 20cm

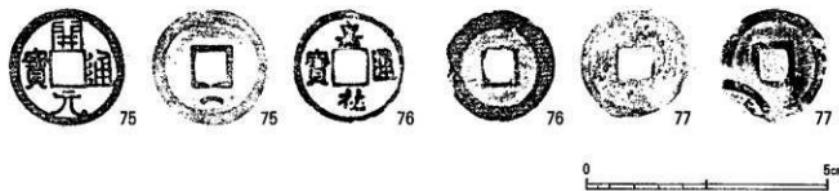
第8図 目垣遺跡 SE-01他 出土遺物実測図(4)



第9図 目垣遺跡 SD-02他 出出土器実測図(5)



第10図 目垣遺跡包含層出土土器実測図（6）



第11図 目垣遺跡SD-01他 出土錢貨

第3節 まとめ

今回の目垣遺跡の調査は、昭和48年度の関西電力鉄塔設置に伴う調査以来の本格的な調査となつた。目垣遺跡は弥生時代の拠点集落になる可能性が高く、以前から注目されていた遺跡であるが、今回は13世紀前半から15世紀前半の中世集落の一端が検出された。当該期の集落遺跡の調査例は近年増加しているが、今だ集落構成を知り得る知見に乏しく、今後の調査の増加と資料の蓄積を待たなければならない状況である。今回の調査で判明した2~3の成果と問題点を以下に箇条書きにして、まとめとしたい。

1. 今回の調査地点では、13世紀前半から15世紀前半にかけての遺構と包含層を確認した。検出された遺構としては井戸と溝を主体としており、柱穴等が認められないため集落の縁辺部にあたるものと思われる。調査区南部で井戸等の遺構が集中しており、北へ移るほど遺構は溝に限定され減少する。このことは、遺物包含層も同様で、東から北へ向かって遺物量は減少し細片が増加する。上記の結果から集落の中心が調査地南方向に広がるものと思われる。

2. 中世における目垣遺跡の広がりとしては、これまでの調査結果と今回の調査成果そして文献資料からある程度の範囲を考えることができる。遺跡の中心としては、前述の調査地南側、現在の崇徳寺や仏照寺付近と考えたい。特に注目されるのは、崇徳寺境内の裏には南北朝から室町時代前半の宝篋印塔や五輪塔が残っていることもあげられる。文献資料によると当該地周辺は中世において目垣氏の本拠地で、目垣城が存在していたことが伝えられている。現在、この目垣城の正確な位置関係や縄張り等は不明だが、今回の調査地点が目垣城の一部である可能性も高いと思われる。

3. 出土遺物としては、比較的一括性の高いSE-04からの遺物群は、和泉型瓦器塊と楠葉型瓦器塊が共存しており、摂津地域における瓦器の併行関係を明らかにし、地域的にも安威川左岸における中世の集落の土器構成を知る資料となった。

また、14世紀後半の楠葉型瓦器塊と和泉型瓦器塊の茨木市域での出土例は少なく、今回の出土例が瓦器終末期の良好な資料になるものと思われる。

他に出土遺物として注目したいのは、輸入陶磁器のうち、今まで茨木市域では検出されていなかった褐釉窯などが出土していることで、更に、白磁の出土量が多さは淀川北岸地域における輸入陶磁器の流通や時期的な多寡について今後の検討課題を提示することになった。

以上のように、目垣遺跡の発掘調査で判明した成果の概要を略述したが、当遺跡をはじめとして、中世全般にわたって茨木市域における遺跡の実態がほとんど判明しておらず、今後は北摂地域という比較的広い範囲で様相解明を検討してみたい。

註1) 平成8年度に今回の北側で試掘調査を実施した結果、中世の遺物包含層を確認し、今回の調査地点よりも北に延びることが判明した。

註2) 茨木市教育委員会『わがまち茨木—城郭編—』

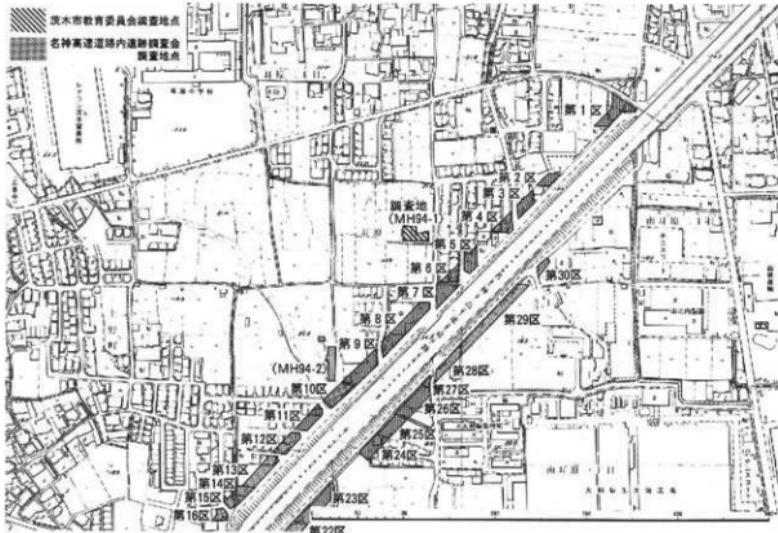
第3章 耳原遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 所在地 茨木市耳原1丁目254
2. 調査面積 約500m²
3. 調査原因 共同住宅建設
4. 耳原遺跡の既往の調査と調査に至る経過

茨木川と安威川に挟まれた舌状台地の縁辺部に立地する耳原遺跡は、耳原1丁目付近一帯に広がる繩文時代後期から中世にかけての遺跡である。以前から土器や石器が表面採集されており、昭和37年に名神高速道路が遺跡の南端を通過することになった。このため、府立春日丘高校などにより緊急の発掘調査が実施され、弥生土器の破片が多数出土しているが、小規模調査であつたため具体的な遺跡の様相等は判明しなかった。昭和53年になって市立耳原小学校が新設されることになり、本格的な発掘調査が実施されたが、弥生土器等の若干の出土をみただけで、遺構までの確認には至らなかった。ⁱⁱⁱ⁾

遺跡の様相が判明するのは昭和54年、台地の東端部において大規模な分譲個人住宅開発に伴って発掘調査が実施されてからである。この発掘調査の結果、北摂地域において初めて繩文時代晩



第12図 耳原遺跡発掘調査位置図

期の甕棺墓（深鉢棺）が15基も検出された。特に、この甕棺墓（深鉢棺）は時期的に船橋式を中心とする滋賀里Ⅲ式期から長原式まで跨まれており、甕棺の中には中河内の生駒西麓産の深鉢が搬入され使用されていることが判明している。また、縄文時代の所産と思われる石鏃が50点以上出土している。弥生時代の遺構として、前期新段階の一部袋状となった長方形の貯蔵穴が検出された。この貯蔵穴からは甕が10数個体、壺1個体、鉢等の完形品が置かれていた状況で出土している。そのほかの遺構として、竪穴住居跡や土壙墓等が検出され、弥生時代の石器としては石斧、敲石、石錐、石庖丁、石劍などが出土している。¹⁹⁾

その後、耳原遺跡は共同住宅建設等の開発に伴って発掘調査が実施されたが、整地工事に伴う北半（N地点）において採集された晚期終末の資料提示²⁰⁾以外は未報告のため詳細は不明である。上記の調査以来、長らく当地は眠りについていたが、再び名神高速道路の拡幅工事に伴い舌状台地の先端の山軸線に対してほぼ直交方向に工区が設定されたことで、発掘調査区は耳原遺跡、五日市遺跡に跨がりその結果、台地直下の平野部の様相も判明することになった。²¹⁾

発掘調査及び整理作業は現在も継続中で、詳細な報告は後日になると思われるが平成7年度の調査成果を中心に主なものを記述すると縄文時代の遺構としては、晚期の土壙が検出されており、深鉢片が出土している。また、遺物としては縄文時代中期末から後期にかけての土器が出土しており、耳原遺跡が確実に縄文時代中期末まで生活痕跡を残していることが判明した。弥生時代の遺構と遺物として、第8調査区から弥生時代中期前半（第Ⅱ様式）の直径約8.7mを測る大型竪穴住居跡が検出されている。第8調査区からは前期新段階の土壙などが出土している。また、第29調査区北東部から弥生時代中期後半（第Ⅳ様式）の甕棺墓が出土しており、従来、弥生時代前期後半から中期前半段階に集落の最盛期を迎えた後は急速に衰退していくと考えられていた耳原遺跡が弥生時代中期後半（第Ⅳ様式）段階にも存続していることが判明した。

今回、報告する調査は茨木市耳原1丁目において共同住宅の建設が計画されたが、当該地は耳原遺跡の中央部にあたり、前述の昭和54年の大規模住宅開発に伴って発掘調査された地点の西側にあたる。また、名神高速道路の拡幅工事に伴う発掘地点の北側にもあたり、縄文時代晚期から弥生時代中期前半の遺構と遺物が検出される可能性が高かった。このため、当該地の遺跡状況を確認する目的で、埋蔵文化財確認依頼に基づき共同住宅の建設予定地において試掘調査を実施した結果、弥生時代の遺物包含層を確認するに至った。

この試掘調査の結果をもとに依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、平成6年5月23日から発掘調査を行ない、平成6年7月4日に現地調査を終了した。

5. 調査の方法

調査にあたっては、協議の結果、共同住宅建設予定地のうち基礎掘削で破壊される共同住宅本体部分を調査対象とした。また、道路側溝部分については側溝掘削時に立会調査を実施した。調査は、盛土・耕作土・床土層を重機によって掘り下げ、以下、遺物包含層と遺構について人力掘削を実施した。排土は場内処理となった。また、調査にあたっては、調査区に合せた任意の地区割を設定し、遺物取上げ及び測量のため3m×3mグリッドを設定して調査を行なった。

第2節 検出遺構と出土遺物

1. 基本層序

調査区の西壁において普遍的にみられる下記の7層を基本層序とした。以下各層について概説する。

- 第1層 盛土（共同住宅建設に伴う造成土）
- 第2層 耕作土（共同住宅建設に伴う造成以前の水田土壤）
- 第3層 黄褐色砂質土層（近世～中世遺物包含層）
- 第4層 淡黄色砂質土層（中世遺物包含層）
- 第5層 明黄茶色砂質土層（弥生時代～古墳時代後期遺物包含層）
- 第6層 黒色礫混粘土層（弥生時代遺物包含層）
- 第7層 明黄色砂礫土層（無遺物層・地山層）

2. 遺構と遺物

今回の調査の結果、弥生時代前期末から中期前半の遺構が確認できた。検出した遺構としては、落ち込みと土壙20基以上、柱穴多数であった。しかしながら、遺物が出土したのは落ち込みと土壙1基から他の土壙や柱穴からの遺物は土器の細片が多く所属時期も不明な点が多いため、以下、落ち込みと弥生時代前期末の土器が出土したSK-01についてのみ検出状況と出土遺物について概説する。

検出遺構（第13図）

落ち込み

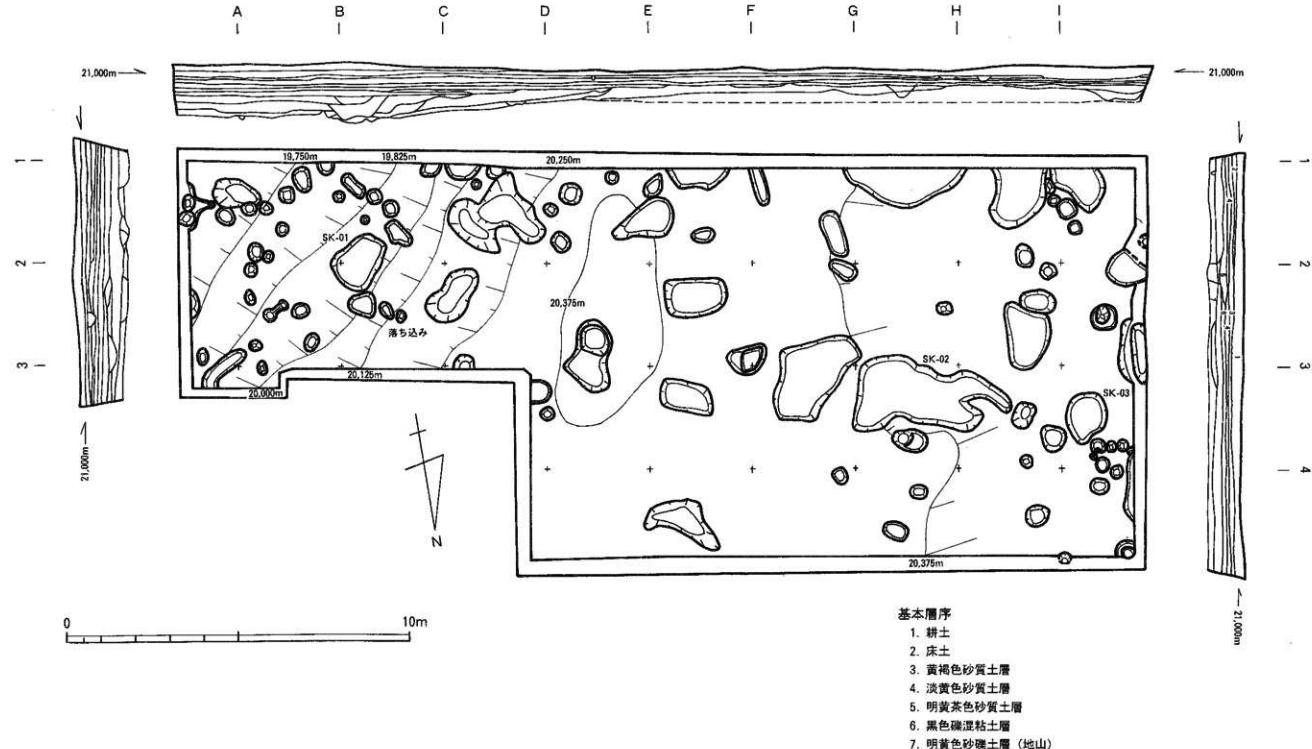
調査区の南東部において検出した自然地形の落ち込みである。埋土は暗黒色礫混粘土で、深さ約60cmを測る。出土遺物は、弥生時代前期末（第I様式新段階）から中期前半（第II様式）の土器が多数出土した。石器としては石庖丁と石鏃が出土している。（第14図～第18図、1～42・第18図、46～47）

SK-01

調査区の南東部の落ち込みで検出された長方形の土壙である。規模は長軸1.6m、短軸1.2m、深さ約60cmを測る。埋土は単層で淡黒色礫混粘土である。出土遺物として弥生時代前期末（第I様式新段階）の甕が出土している。（第18図、45）

その他の土壙及び柱穴

調査区全域で土壙が20基以上検出されたが、上記、SK-01以外ほとんどが土器の細片程度で性格等は不明である。これらの土壙の多くは、断面が皿状を呈する浅いもので、形状も不定形なもののが多かった。柱穴についても調査区全域で多数検出されたが、掘立柱建物として確実に建つものは一棟もなかった。



第13図 耳原遺跡 遺構平面図

出土遺物（第14図～第19図）

出土遺物は、落ち込みから土器が集中して出土している。落ち込み以外から遺物が出土したのは、遺構面直上とSK-01だけであった。包含層からの出土遺物は、弥生時代から中世までにわたっているが、細片が多く測定できた資料はない。このため、落ち込みから出土した弥生土器を中心に記述していく。

落ち込み出土の土器（第14図～第18図、1～42）

(1)～(20)は甕である。如意形口縁に刻み目そしてヘラ描き沈線を頸部に施すタイプ（4、5、7、8等）や如意形口縁に刻み目を施さず体部は刷毛目調整を施すタイプ（9、10、11、14等）がある。また、如意形口縁に刻み目のみでナデ調整を施すタイプ（1～6）や如意形口縁にナデ調整のみ仕上げるタイプ（12、13、15等）などがある。類例の少ないタイプとしては口縁部に粘土帯を貼り付け逆L状の突帶状を付けている甕（16）や口縁部が短く体部外面を粗い刷毛目調整を施すタイプがあり、他地域からの搬入品の可能性が高いものである（18）。また、口縁部と頸部の境目に断面三角形の粘土帯を貼り付ける甕（19）も出土している。

特にめずらしい土器としては口縁部に断面三角形の粘土帯を貼り付け逆L状の口縁部を呈し、体部には細かい刷毛目調整を施す甕（20）がある。これらは、類例の少ない甕で断定はできないが（16）と同じく、朝鮮系無文土器あるいは中部瀬戸内方面からの搬入品の可能性があると思われる。

(21)～(27)は広口壺である。口縁部が大きく開き、頸部にヘラ描き沈線を多条施すタイプ（21、22、24等）がある。また、頸部に突帶を貼り付け刻み目を施すもの（22）や口縁部が短く開き、口縁部直下から頸部外面にかけて細かい刷毛目調整を施すタイプ（25、27）などがある。第II様式の壺としては（26）があり、口頸部が漏斗状に開き、口縁端部に刻み目を施す。

(28)は甕蓋である。笠形を呈し、口縁部が水平方向に開いている。

(29)は第II様式の鉢である。口縁部直下に櫛描直線文を施す。体部は斜め方向の刷毛目調整を施す。

(30)～(42)は甕及び壺の底部である。全体的に上から下への粗い刷毛目調整を施す底部が多い。

遺構面直上出土の土器（第18図、43～44）

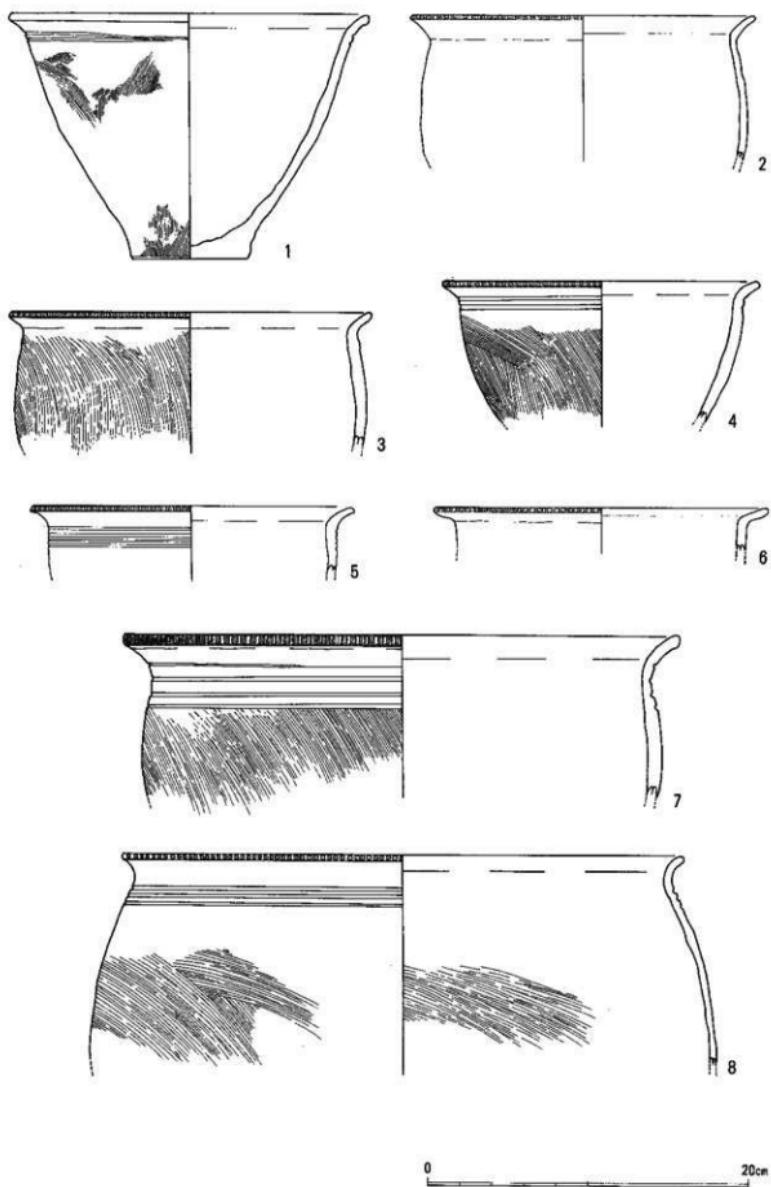
(43)～(44)は甕である。特に（44）は如意形口縁に刻み目を施さず体部は刷毛目調整を施している。

SK-01出土の土器（第18図、45）

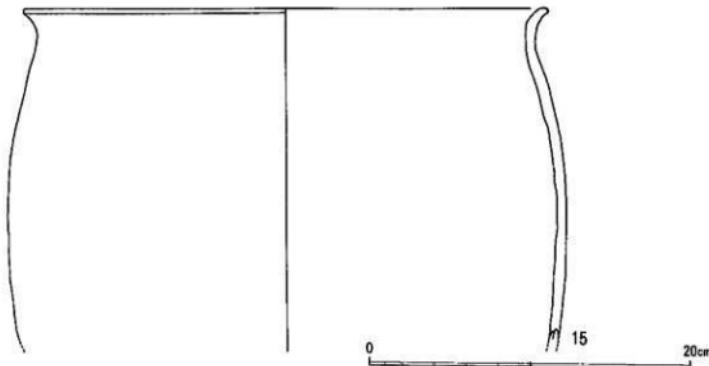
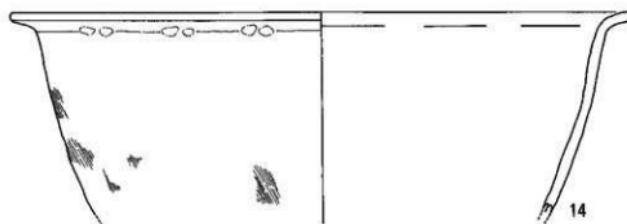
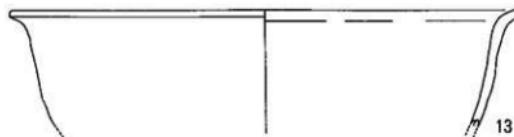
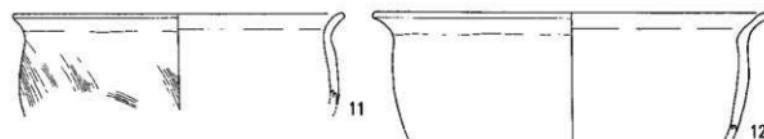
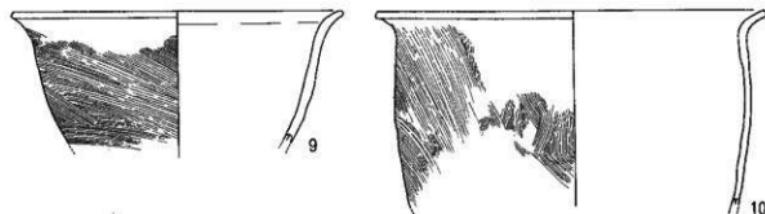
(45)は甕である。如意形口縁に刻み目そしてヘラ描き沈線を頸部に施し、体部は刷毛目調整を施している。

落ち込み出土の石器（第19図46～47）

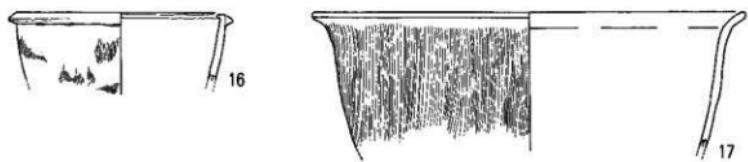
(46)は、粘板岩製の石庖丁である。直線刃半月形で中央に2ヶ所に紐孔を穿孔している。残念ながら半分欠損している。残存長9.7cm、幅5.0cm、重さ4.55gを測る。(47)は平基無茎式石鏃である。材質はサヌカイトで一部自然面が残る。最大長2.2cm、幅1.3cm、重さ1.5gを測る。



第14図 耳原遺跡 落ち込み出土土器実測図（1）



第15図 耳原遺跡 落ち込み出土土器実測図（2）



16

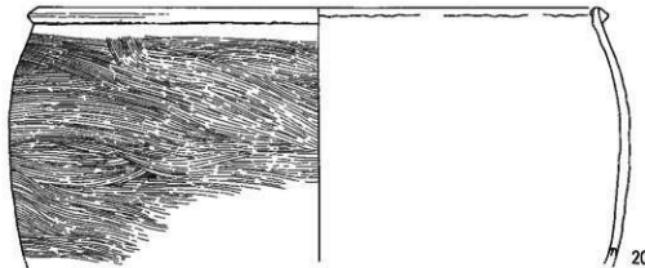
17



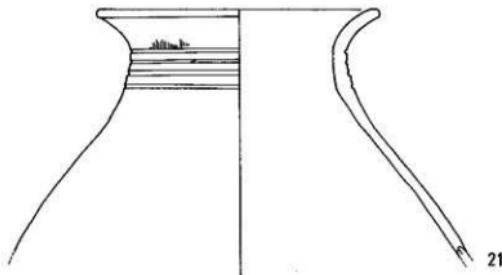
18



19



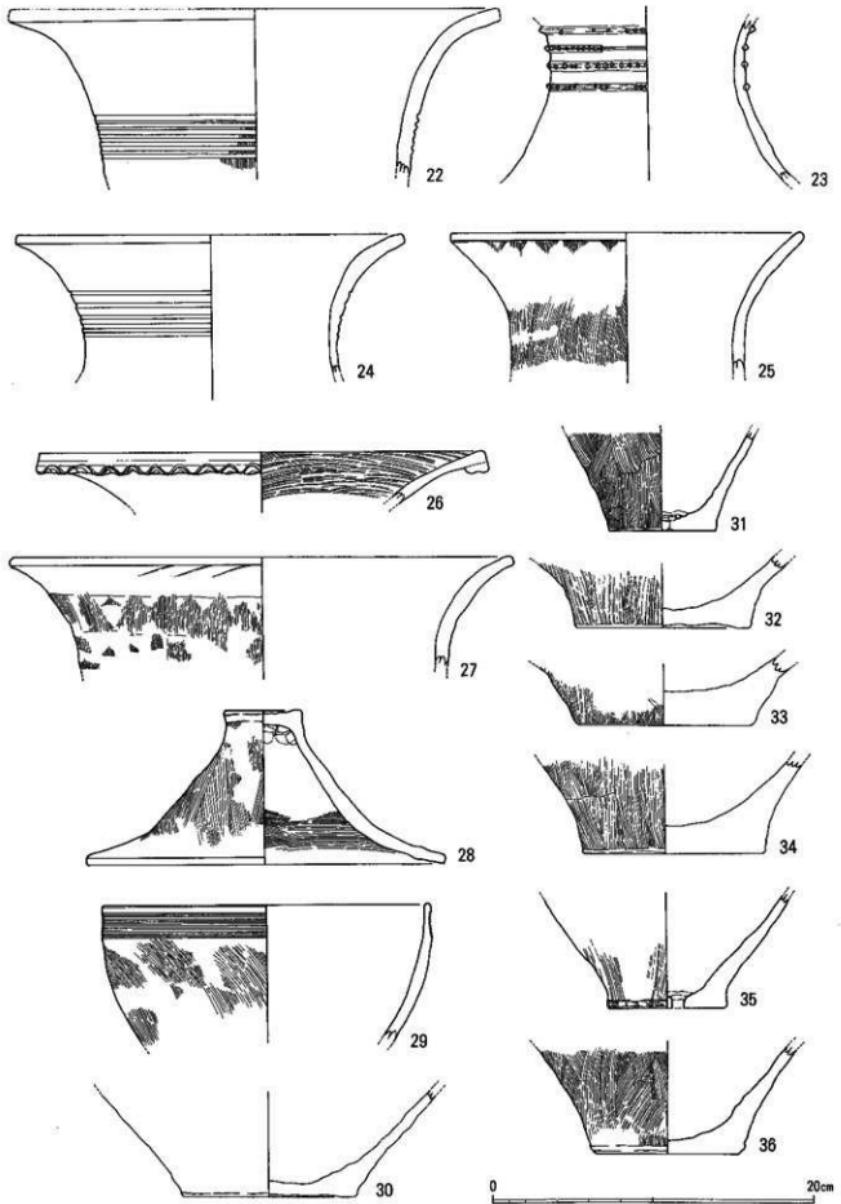
20



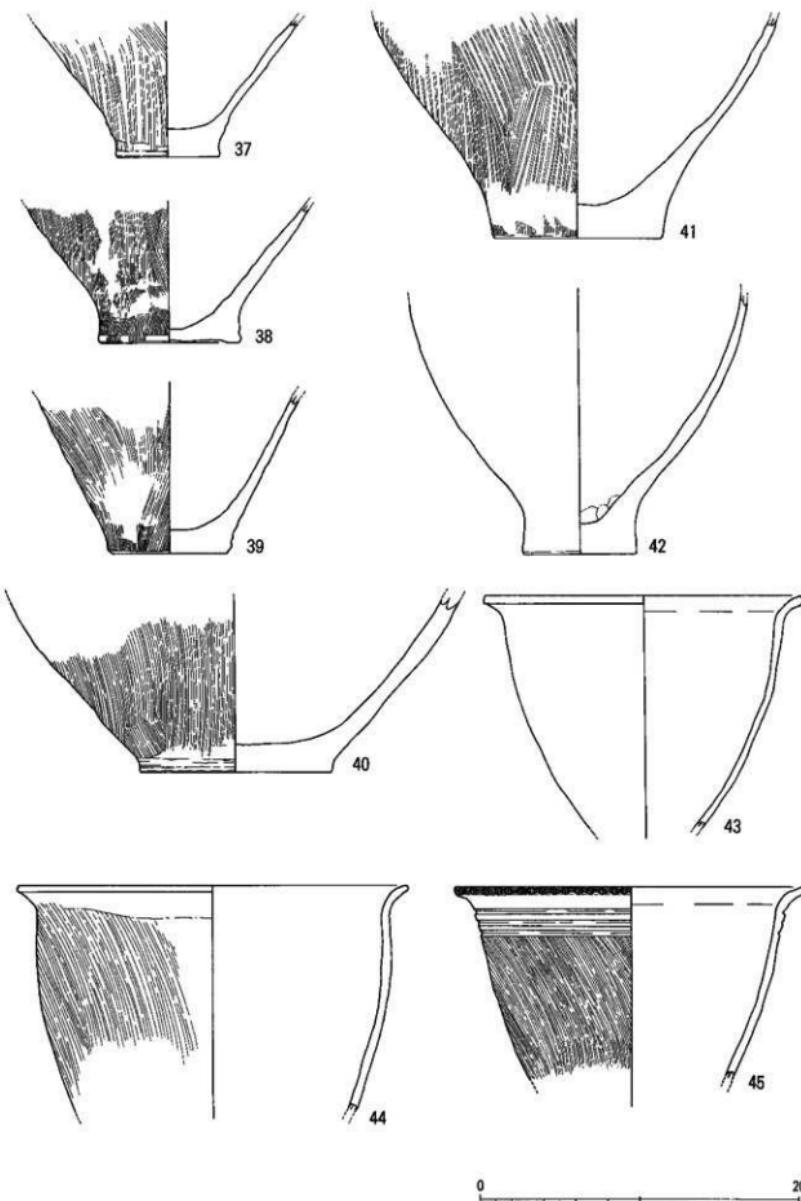
21

0 20cm

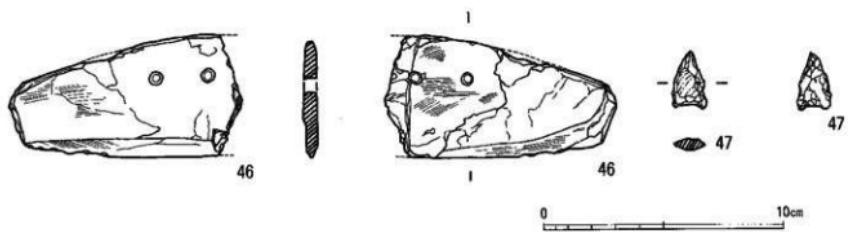
第16図 耳原遺跡 落ち込み出土土器実測図（3）



第17図 耳原遺跡 落ち込み出土土器実測図（4）



第18図 耳原遺跡 落ち込み他 出土土器実測図（5）



第19図 耳原遺跡 落ち込み出土石器実測図（6）

第3節 まとめ

三島地域における縄文時代の動向については資料の貧弱さから多くを語ることができなかった。そうした中、耳原遺跡は三島地域において初めて晩期の甕棺墓群が検出されたことで、從前から注目されてきた遺跡である。また、三島地域の弥生時代の集落動向を考える時、弥生時代前半期における耳原遺跡の集落状況が判然としないのと比較して、弥生時代前期末から中期前半にかけて再び集落規模が大きくなることなどが指摘できる。このため、耳原遺跡と同様の集落動向を示す対岸の郡遺跡とともに弥生時代の三島地域において重要な遺跡となっている。上記の状況下で実施した発掘調査であったが、今回の調査で判明した点を考察をまじえながら列記すると下記のごとくになる。

(1) 今回、調査によって判明した点としては、過去、当該地の東側で検出された縄文時代晩期の甕棺墓群が今回の調査地点まで延びない事があげられる。このことは、今回検出された自然の落ち込みが墓域を区切る谷を呈していたことにより判明した。現在、遺物整理中であるが当該地の西側で平成6年度に実施した調査地点(M.H. 95-2)から縄文時代晩期の甕棺墓が検出されており、今回の落ち込みを挟んで東側と西側に墓域を形成していたものと思われる。

やがて弥生時代になると落ち込みは東側の集落からの土器等の廃棄場になっており、弥生時代前期末から中期前半に少しづつ埋没していったと思われる。

(2) 今回、落ち込みから出土した土器は弥生時代前期末から中期前半にかけての幅があるものの比較的まとまって耳原遺跡の土器を提示することができた。落ち込みから出土した土器群は最近の摂津地域における細かな編年においては摂津I-4様式から摂津II-1様式¹⁾に該当する。

三島地域における当該期の資料としては安満遺跡や目垣遺跡などがあるが西摂地域と比べて、資料的に少ない。こうした状況下の中で昭和54年の調査で検出された耳原遺跡の貯蔵穴と思われる土壙²⁾の土器群は摂津地域の重要な基準資料となっている。

以上のように、今回の調査は、耳原遺跡中央部において縄文時代晩期における様相や弥生時代前期末から中期前半にかけてのことが判明した。これらから耳原遺跡の弥生時代における集落の一端が解明され、土器等の資料提示ができたと思う。

註1) 茨木市教育委員会『茨木の史跡』

註2) 茨木市教育委員会『耳原遺跡発掘調査概報』1982年

註3) 名神高速道路内遺跡調査会『茨木市耳原遺跡の調査成果－平成7年度の調査を中心に』

『第34回 大阪府下埋蔵文化財研究会資料』

註4) 森田 克行『三島地方の縄文土器』『高槻市文化財年報昭和61・62年度』高槻市教育委員会1989年4月

註5) 森田 克行『摂津地域』寺沢 薫・森岡 秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編II 1990年

第4章 総持寺北遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 所在地 茨木市東太田3丁目129-1、131-1 (S J - N • 95-1)

茨木市東太田3丁目72-1 (S J - N • 96-1)

2. 調査面積 約525m² (S J - N • 95-1)

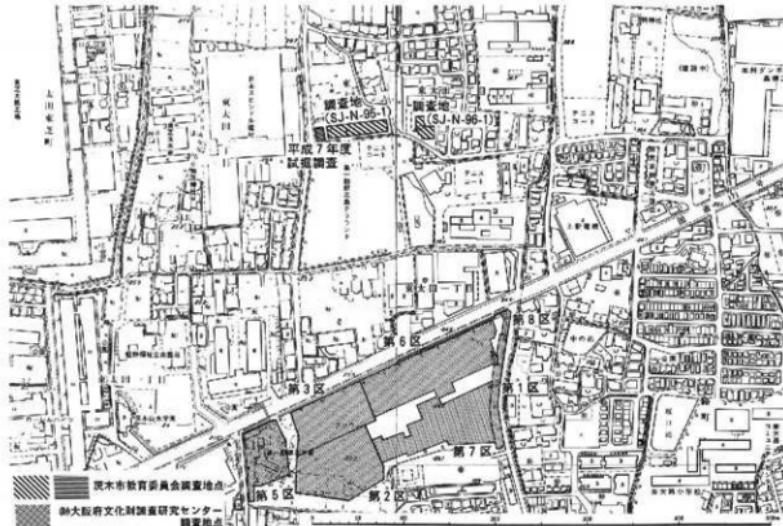
約220m² (S J - N • 96-1)

3. 調査原因 共同住宅建設

4. 総持寺北遺跡の既往の調査と調査に至る経過

今回の調査地点周辺の東太田地域は、早くから市街地化していたため遺跡の存在が不明で、長く遺跡の空白地帯となっていた。総持寺北遺跡は、平成5年度に茨木市教育委員会が三島丘3丁目に所在する第一勵業銀行茨木グランド跡地に住宅都市整備公団マンションが建設されることに伴う試掘調査により発見された新遺跡である。

その後、本格的な発掘調査は睇大阪府文化財調査研究センターが担当することになり、平成6年度から実施されている。これまでの調査から総持寺北遺跡は弥生時代から中近世までの複合遺跡で、奈良時代末から平安時代初頭（8世紀末）の掘立柱建物群が検出されている。この掘立柱



第20図 総持寺北遺跡発掘調査位置図

建物群は小規模ながら配置に規則性が認められ東西に大きく二分される。西の一群は主に総柱建物で構成され、一方、東の一群には一棟を除いて総柱建物がないという特徴をもっている。出土遺物も豊富で帰属や役人などが見に着けていた石帶（巡方）や円面鏡などが出土しており、官衙的性格を持った遺跡と考えられている。また、掘立柱建物群・井戸・墓等で構成される中世の屋敷地が検出されており、当該地域の中世村落の様相の一端が明らかになっている。

今回、平成7年度と平成8年度にかけて、茨木市東太田3丁目において相次いで共同住宅建設が計画された。当地は、平成7年時点で周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、敷地面積が500m²を越えるため、開発指導要綱にもとづいて事前に遺跡の状況を確認する目的で平成7年4月14日に試掘調査を実施した。

試掘調査は敷地内に試掘壙を設け断面観察を中心に実施した。試掘調査の結果、西側に設定した試掘壙から古墳時代後期から中世にかけての遺物包含層が検出された。

上記の結果を踏まえ、当該地全域には良好な遺物包含層と遺構が存在しているものと判断され、その後、依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、平成7年11月20日から発掘調査を行ない、平成8年1月8日に現地調査を終了した。

平成8年度に入って昨年度の調査地の東側で再び共同住宅建設が計画され平成8年5月27日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、敷地の中央部に設定した試掘壙から中世の遺物包含層が検出された。このため、昨年度の発掘調査の成果と今回の試掘調査の結果から、当該地まで良好な遺物包含層と遺構が延びているものと判断された。この試掘調査の結果をもとに依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、再び平成8年7月10日から発掘調査を行ない、平成8年8月12日に現地調査を終了した。

5. 調査の方法

調査にあたっては、協議の結果、共同住宅建設予定地のうち基礎掘削等で破壊される共同住宅本体部分を調査対象とした。調査は、耕作土、床土層を重機によって掘り下げ、以下、遺物包含層と遺構については人力掘削を実施した。排土は場内処理となった。また、調査にあたっては、調査区に合わせた任意の地区割を設定し、遺物取り上げ及び測量のため3m×3mグリッドを設定して調査を行なった。

第2節 検出遺構と出土遺物

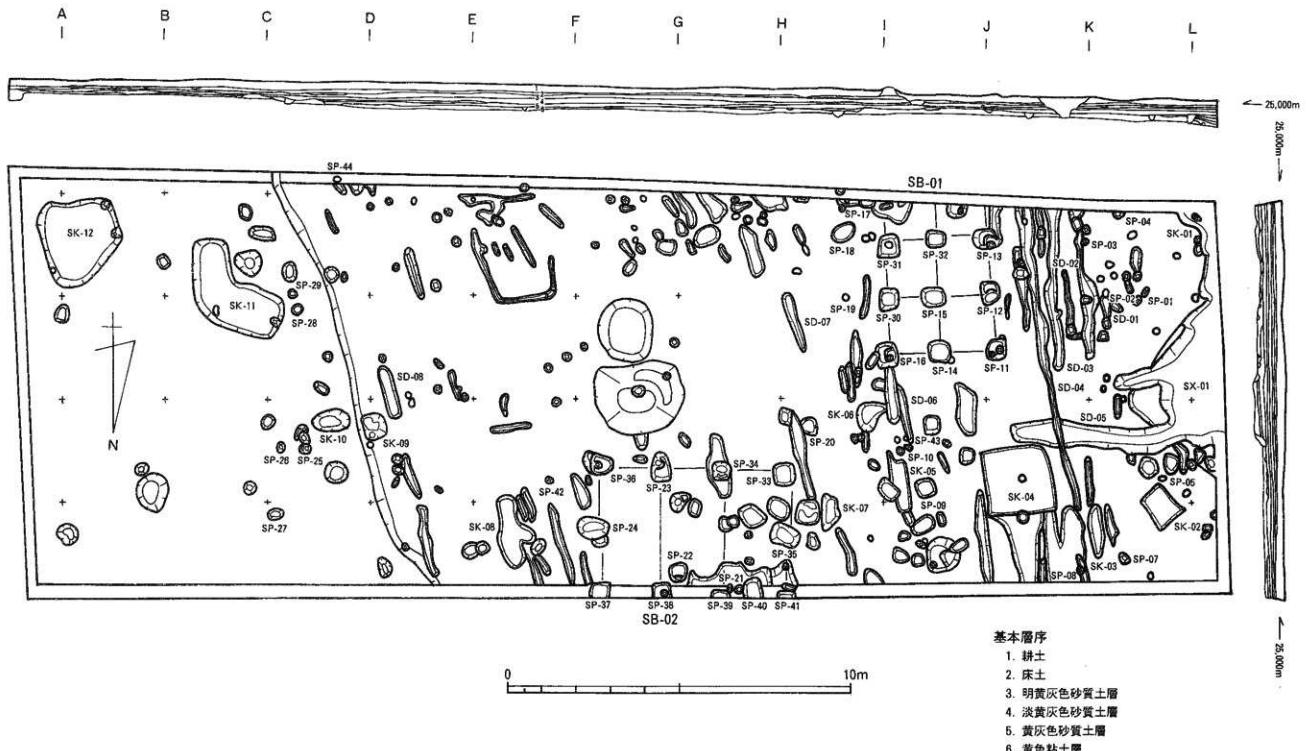
SJ-N・95-1の調査

1. 基本層序

調査区の南壁において普遍的にみられる下記の6層を基本層序とした。以下各層について概説する。

第1層 耕作土

第2層 床土層

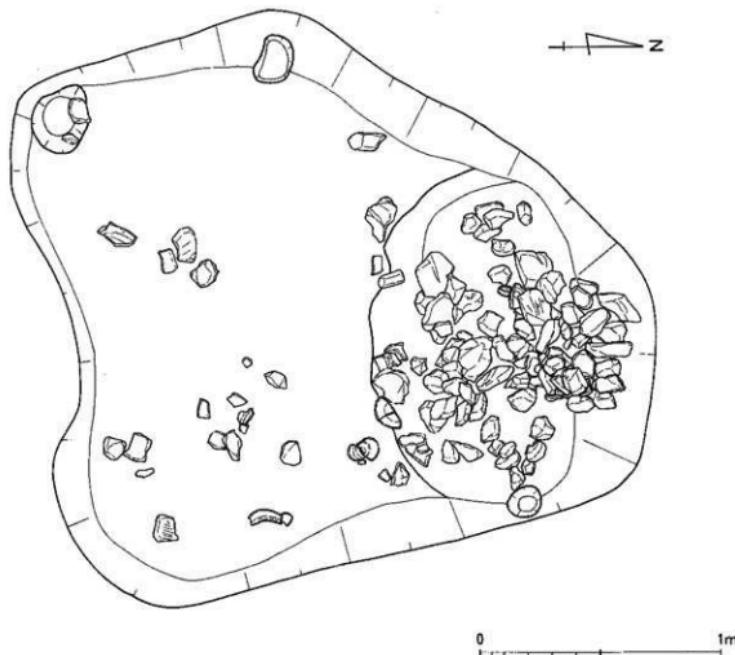


總持寺北遺跡 (S J - N • 95-1) 遺構平面図

- 第3層 明黄灰色砂質土層（近世～中世遺物包含層）
 第4層 淡黄灰色砂質土層（中世遺物包含層）
 第5層 黄灰色砂質土層（古墳時代後期～平安時代前半の遺物包含層）
 第6層 黄色粘土層（無遺物層、地山層）

2 遺構と遺物

今回の調査の結果、検出したのは掘立柱建物2棟と集石土壙や落ち込みそして土壙及び柱穴多数であった。柱穴等の遺構を多数検出したが、明確に建物として確定できたのは2棟のみで、全体的に遺物の出土量が少ないため所属時期分かりにくい遺構多かった。出土遺物については比較的多種多様な遺物が出土している遺物包含層のものを中心に記述することにとし、遺構については掘立柱建物2棟と集石土壙及び落ち込みを中心に検出状況と出土遺物について概説することにした。



第22図 総持寺北遺跡（S J - N・95-1）SK-12 土器・集石出土状況図

検出遺構（第21図・第22図）

掘立柱建物－1

調査区の南西部において検出した南北棟総柱の建物である。2間×3間まで検出したが南側は調査区外まで延びているため正確な建物の規模は不明である。柱穴埋土からは奈良時代末から平安時代初頭（8世紀末）の須恵器片と土師器片が少量出土している。

掘立柱建物－2

調査区の北部端において検出した東西棟の建物である。2間×3間まで検出したが北側は調査区外まで延びているため正確な建物の規模は不明である。柱穴埋土からは奈良時代末から平安時代初頭（8世紀末）の須恵器片と土師器片が少量出土している。また、南西隅の柱穴（S P-33）からは縄文時代の石鎌が出土している。（第27図、37）

S K -12

調査区の東南隅において検出した。土壤の規模は、長軸2.45m、短軸2.35m、深さ19.5cmを測る。土壤の中には人頭大の石が乱雜に放り込まれており埋土は暗黄色粘質土であった。出土遺物としては、7世紀後半の須恵器の杯身や杯蓋そして移動式の壺の一部や羽釜などが出土している。（第24図、7～10）

S X -01

調査区の西端部において検出した不定形の落ち込みである。埋土は淡黄色粘質土で出土遺物としては奈良時代後半の平瓦や須恵器の高台などが出土している。（第24図、4～6）

その他の土壤及び柱穴

調査区全域で土壤が15基以上検出されたが、大半の土壤から遺物はまったく出土しておらず所属時期も不明な物が多い。そのなかで、S K -02からは平安時代初頭の須恵器の杯身の高台部分が（第24図、1～2）、また、奈良時代後半から末にかけての須恵器の壺の底部が出土している。（第24図、3）柱穴についても調査区全域で多数検出したが、上記の掘立柱建物以外は建物として確定できる材料に乏しかった。

出土遺物（第24図～第27図）

今回の調査地点からの出土遺物の大半が遺物包含層からである。遺構からの出土は少ない。遺物包含層からの出土傾向としては第4層の淡黄灰色砂質土層からは中世期の遺物が、第5層の黄灰色砂質土層からは奈良時代後半から平安時代前半の遺物が出土している。以下、遺物包含層から出土した遺物を中心に記述する。

S K -02出土の土器（第24図、1～2）

(1)は須恵器の壺の底部である。(2)は須恵器の杯身の底部である。

S K -05出土の土器（第24図、3）

(3) は須恵器の壺の底部である。

S X - 01出土の土器 (第24図、4~6)

(4) は須恵器の杯身の口縁部である。(5) は須恵器の杯身の底部である。(6) は平瓦片である。凸面は縄目タタキ、凹面は布目痕を残す。

S K - 12出土の土器 (第24図、7~11)

(7) は須恵器の杯蓋である。口縁部内面にかえりを持つ。(8) は須恵器の杯身である。(9) も須恵器の杯身であるが(8) に比べてやや深い。(10) は、高台が付く須恵器の杯身である。高台はあまり高くなく外方にふんばる。(11) は土師器の羽釜の鉗の部分である。口縁部及び体部は欠損する。

遺物包含層 (第5層) の出土の土器 (第24図、12~20)

(7) は高台が付く須恵器の杯身である。高台はあまり高くなく外方にふんばる。(13) は高台が付く須恵器の壺の底部である。(7) は高台が付く須恵器の大型の杯身である。(16) は須恵器の短頸壺の口縁部である。(17) は口縁部直下に鉗が付く土師器の羽釜である。(18) は中型の須恵器の壺の口縁部である。(19) は内面にかえりが付く須恵器の杯蓋である。(20) は土師器の皿である。摩滅が著しく内面の調整等は不明である。

遺物包含層 (第3層・第4層) の出土の土器 (第25図、21~31)

(21) は口縁部が外反する瀬戸焼の青磁皿である。(22) は青磁碗である。である。全体的に摩滅が著しく内外面の調整等は不明である。(23) は青磁碗である。外面に蓮弁文を施す。(24) は白磁碗である。内面に一条の沈線を施す。(25) は白磁碗である。口縁端部は外反する。(26) は白磁碗である。口縁部は玉縁を呈する。(27) は瓦器皿である。内面にヘラミガキを施す。(28) は瓦器皿である。外面には指頭圧痕、内面にヘラミガキを施す。(29) は黒色土器B類あるいは瓦器皿の底部である。全体的に摩滅が著しいが内面には横方向のヘラミガキが認められる。(30) は比較的小型の東播系須恵器の捏鉢である。(31) は瀬戸焼のおろし皿である。底部外面には糸切り痕を残す。内面には格子状のおろし目を施す。

遺物包含層 (第5層) の出土の瓦 (第25図、32~35)

(32) は単弁蓮華文軒丸瓦である。面径は13.4cmを測る。蓮華文の一部しか残存していないが、太田庵寺出土の軒丸瓦と同じものと思われる。(33) は丸瓦あるいは平瓦である。凸面はヘラ削り、内面には布目痕が残る。(34) と(35) は平瓦である。凸面はヘラ削り、内面には布目痕が残る。

S K - 07・S P - 33出土の石器 (第27図、36~37)

(36) は凹基有茎式石鐵である。小型の石鐵で長軸2.2cm、厚さ3mm、重さ500mgを測る。全体的に風化が著しい。材質はサヌカイトか。(37) は凹基有茎式石鐵である。長軸の石鐵で側縁に沿って細かい調整剥離を施す。長軸3.1cm、厚さ3mm、重さ1gを測る。材質はサヌカイト。

S J - N • 96-1 の調査

1. 基本層序

調査区の北壁において普遍的にみられる下記の5層を基本層序とした。以下各層について概説する。

- 第1層 盛土層（駐車場建設時の造成土）
- 第2層 耕土層（駐車場建設以前の水田）
- 第3層 明黄色粘質土層（中世遺物包含層）
- 第4層 暗黄褐色粘質土層（古墳時代後期～中世遺物包含層）
- 第5層 黄色粘土層（無遺物層・地山層）

2. 遺構と遺物

今回の調査の結果、検出した遺構としては、中世の水田に伴う東西溝（S D-01）などを確認した。しかしながら、中世以前の遺構はまったく検出されなかった。このことは、当地点が西側の調査地点と比較して標高が高いことがあげられ、西側で検出された奈良時代末から平安時代前期初頭を中心とする遺構の大半と遺物包含層が中世段階において水田を造成するにあたって削平されたものと思われる。出土遺物については古墳時代後期～中世までの土器などが出土したが、細片が多く図化できる遺物は一点もなかった。このため、概説するのは比較的時期の限定できる土器が出土している溝（S D-01）のみとする。

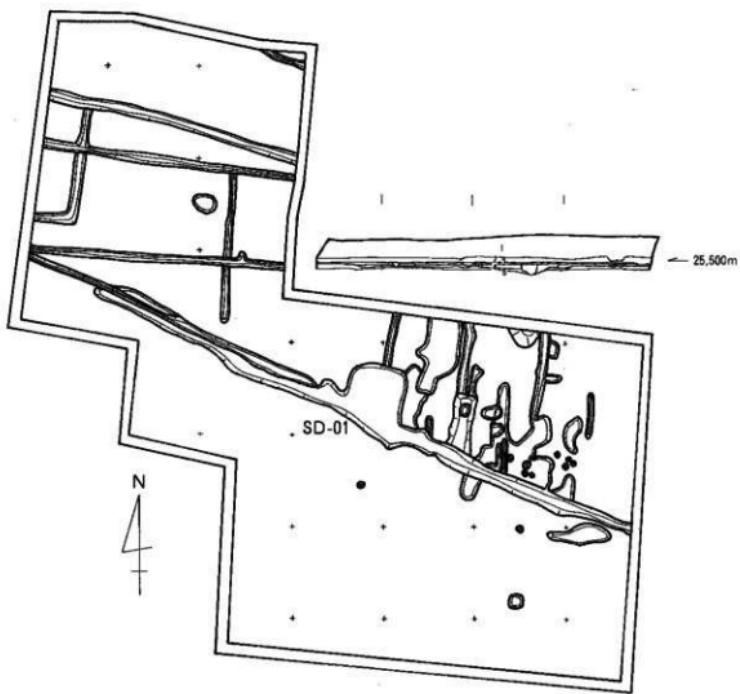
検出遺構（第23図）

S D-01

調査区の中央部で検出された東西溝である。溝幅約6.0cm、深さは約8.0cmを測る。溝埋土は黃灰色砂質土で、へそ皿傾向の土師皿が出土している。

その他の溝及び土壤

調査区に中央部から北部にかけて上記、S D-01以外溝及び土壤が検出されたが、ほとんどの遺構の埋土は黄灰色砂質土であった。出土遺物はなく、S D-01と同時期の水田に伴う遺構と思われる。

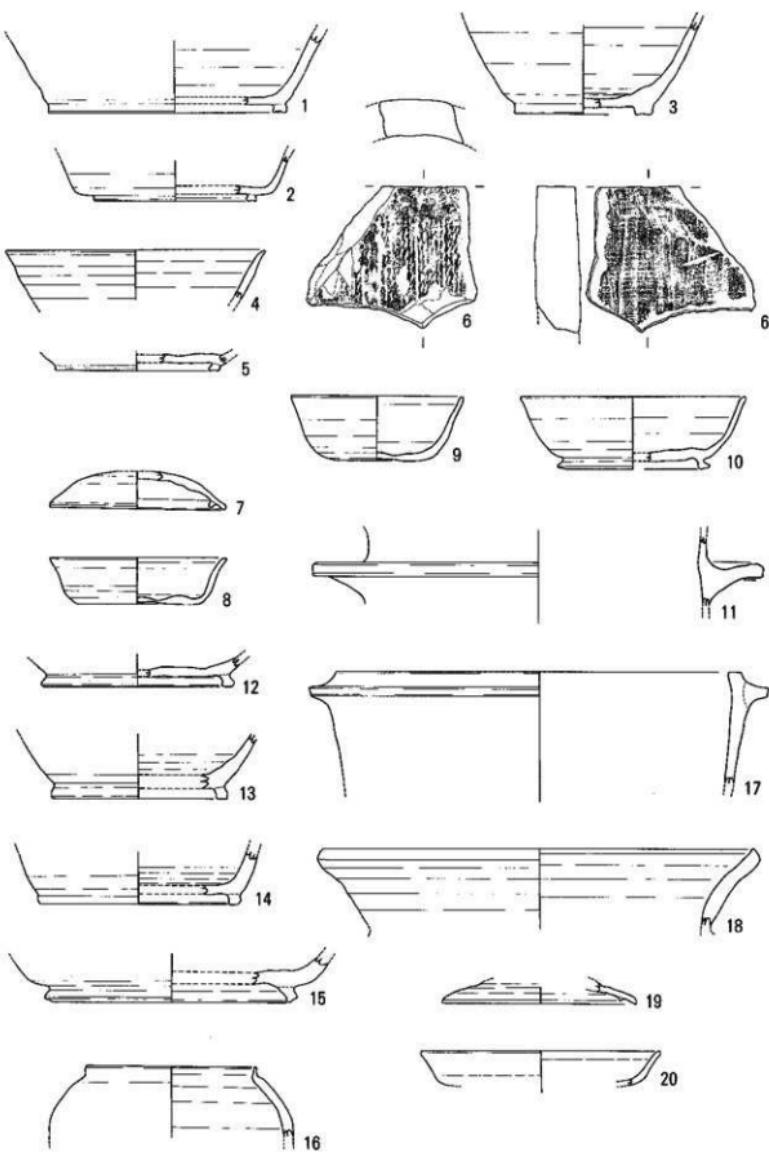


基本層序

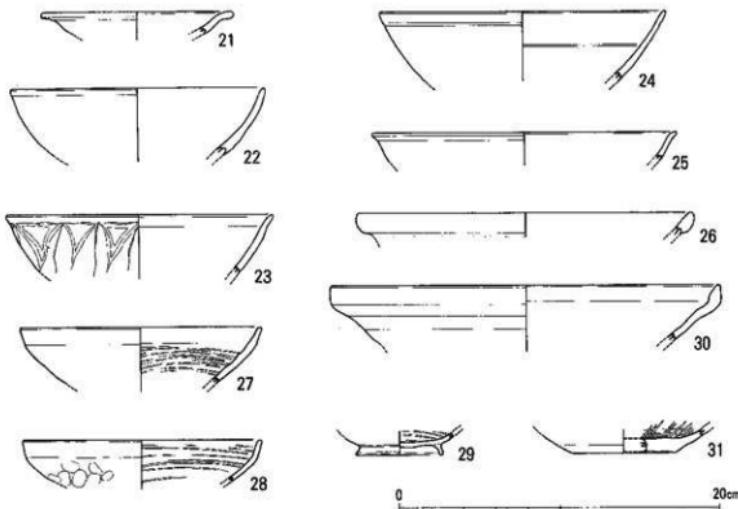
1. 盛土
2. 耕土
3. 明黄色粘質土層
4. 明黃褐色粘質土層
5. 黃色粘土層

0 10m

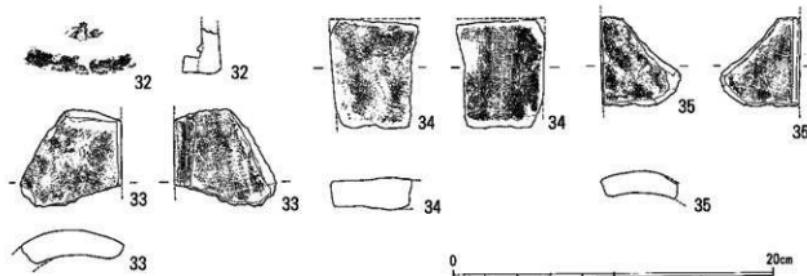
第23図 総持寺北遺跡（S J - N • 96 - 1）遺構平面図



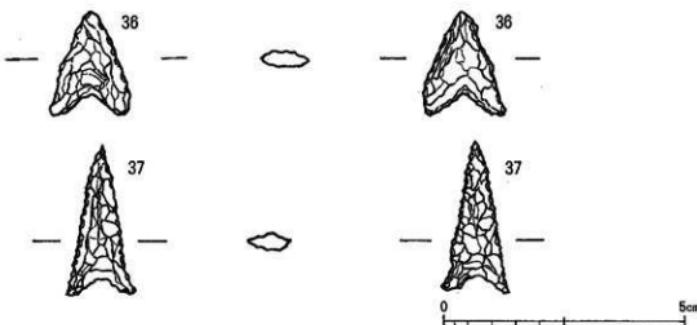
第24図 総持寺北遺跡 (SJ-N-95-1) 出土土器他実測図 (1)



第25図 総持寺北遺跡（S J - N • 95-1）出土土器実測図（2）



第26図 総持寺北遺跡（S J - N • 95-1）出土瓦実測図（3）



第27図 総持寺北遺跡（S J - N • 95-1）出土石器実測図（4）

第3節 まとめ

今回の調査は、新しく発見された遺跡のため、確認調査の意味合いが強い。現在も¹⁾大阪府文化財調査研究センターが総持寺北遺跡の調査を継続中であるが、東太田から三島丘にかけての台地上に奈良時代末から平安時代前半の掘立柱建物群が存在していたことは注目してよいだろう。その後、中世段階になって集落跡や台地上に水田を開くなど土地利用の変遷が判明した。今回の調査で判明した成果と問題点を以下に箇条書きにしてまとめとしたい。

1. これまで当該地近辺は、南に位置する総持寺遺跡と北に存在する太田廃寺そして台地の西の太田遺跡に挟まれた遺跡の空白地域で、今回の発掘調査は貴重な考古学的知見を得るよい機会となった。特に今回の両地点の調査で奈良時代末から平安時代前半の掘立柱建物や7世紀後半まで遡る集石土壤の検出や、中世段階に台地上に水田を開いていた事例などが確認されたことは重要である。更にこれまで考えられていた総持寺北遺跡の範囲が国道171号線付近から一挙に北に拡大し、ほぼ東太田2丁目から3丁目にかけて広がることになった。
2. 総持寺北遺跡の遺跡としての広がりとしては今回の調査地点を中心に考えると、南側は前述の通り¹⁾大阪府文化財調査研究センター調査地まで広がっていると考えられるが、西側については台地の裾部近くまで延びている可能性が高い。この事は平成7年度に調査地点の西側の敷地において試掘調査を実施して良好な遺物包含層を確認している。また、東側については詳細は分からぬが、地形的に上がっていることから中世段階の水田開発に伴って削平されている可能性が高いと思われる。以前、北東側で平成8年度に大規模なマンション開発に伴う試掘調査と立会調査を実施したが遺構も遺物包含層が確認されずに地山層が露出した。また、高槻市側の赤大路町の試掘調査においても遺構・遺物が確認されなかつたこと等の結果から東側については今回の調査地点より延びないものと思われる。北側についてはまったく不明である。
3. 今回、出土した遺物を詳細に検討すると、注目してよいのは少量ながら瓦が出土していることである。これまで¹⁾大阪府文化財調査研究センターが調査している第一勧業銀行の跡地内においても瓦や磚が出土しているが、これらは南に位置する総持寺から搬入されたことが判明している。一方、今回の調査地点から検出された瓦は北に位置する太田廃寺から運ばれてきたものである。太田廃寺については詳しい発掘調査が実施されていないため伽藍配置等も判明しておらず現在は、東芝茨木工場建設時の切土によって大半が消滅しており、幻の寺となりつつある。今回、太田廃寺の瓦片が出土したことは当該地周辺まで同廃寺に関する何等かの施設があったものと考えたい。

以上のように、総持寺北遺跡の発掘調査で判明した成果を略述したが、今後は、当該地周辺の調査例の増加を期待するところである。

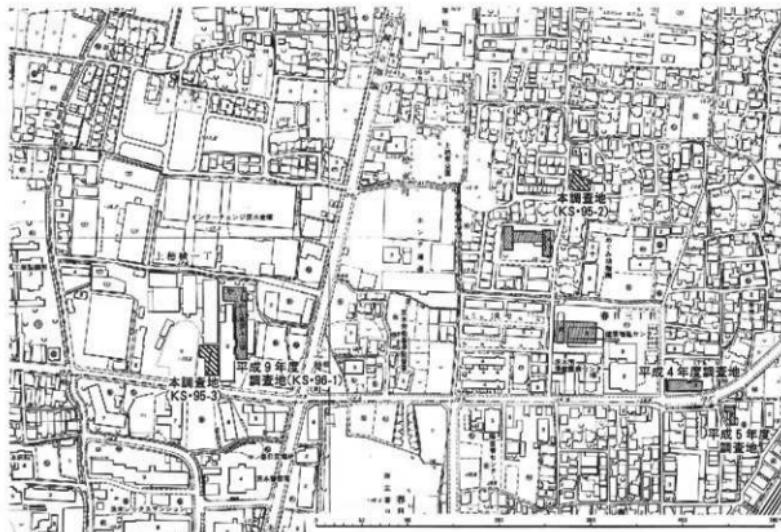
註1) 久家隆芳「茨木市総持寺遺跡発掘調査概要」¹⁾大阪府文化財調査研究センター『大阪府下埋蔵文化財研究会資料』1996年

第5章 春日遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 所在地 津木市春日5丁目84番1 (KS・95-2)
津木市上穂積1丁目2番1号 (KS・95-3)
2. 調査面積 約525m² (KS・95-2)
約340m² (KS・95-3)
3. 調査原因 マンション建設 (KS・95-2)
自動車販売店建設 (KS・95-3)
4. 春日遺跡の既往の調査と調査に至る経過

今回の調査地点の春日5丁目から上穂積にかけての地域は、周知の埋蔵文化財包蔵地で春日遺跡の中央部から西部にあたり、地形的には、千里丘陵からのびる低位段丘と津木川が形成した扇状地に立地する集落遺跡である。春日遺跡は近年、断続的に発掘調査を実施しており、弥生時代中期から中近世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に、古墳時代中期から後期にかけて遺跡の規模がもっとも大きくなることが判明しており、近隣の郡遺跡・倍賀遺跡と合わせて遺跡群を形成しているものと考えられる。



第28図 春日遺跡発掘調査位置図

しかしながら、今回報告する春日5丁目から上穂積1丁目にかけての地域は早くから市街地化しており、再開発に伴って発掘調査を実施する以外、遺跡の様相等は明らかにされていない。また、数少ない発掘調査を実施している地点でもほとんどが未報告状態であるため、現時点で明らかにされているのは、春日5丁目から3丁目にかけては古墳時代後期には集落域にあたっていること、そして上穂積1丁目から2丁目にかけて千里丘陵の裾に沿って南北に墓域が広がっていることが確認されているぐらいである。

今回、平成8年度の中で、茨木市春日5丁目と上穂積1丁目において相次いでマンション建設と自動車販売店建設が計画された。このため、両地点とも周知の埋蔵文化財包蔵地の春日遺跡の範囲内に所在するため、事前に遺跡の状況を確認する目的で試掘調査を実施した。

春日5丁目のマンション建設地点については平成7年9月27日に試掘調査を実施し、上穂積1丁目自動車販売店建設地点については平成8年2月2日に試掘調査を実施した。

前者の試掘調査は敷地内に3ヶ所試掘場を設け断面観察を中心に実施した。試掘調査の結果、既存の建物の基礎で破壊されていた部分も多かったが、まぬがれた部分については良好な古墳時代後期から中世にかけての遺物包含層が検出された。

上記の結果を踏まえ、当該地においては既存の建物によって破壊されている部分を除いては良好な遺物包含層と遺構が存在しているものと判断された。これをもとに依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、平成7年11月8日から発掘調査を行ない、平成7年12月18日に現地調査を終了した。

後者の試掘調査は2回にわたり敷地内に合計4ヶ所試掘場を設け断面観察を中心に実施した。試掘調査の結果、敷地に設定した試掘場すべてから古墳時代後期から中世にかけての遺物包含層が検出された。このため、近隣の発掘調査の成果と今回の試掘調査の結果から、当該地には良好な遺物包含層と遺構が存在し、特に、埴輪片の出土から埋没痕が検出される可能性が高いと判断された。この試掘調査の結果をもとに依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、平成8年2月19日から発掘調査を行ない、平成8年3月26日に現地調査を終了した。

5. 調査の方法

調査にあたっては、協議の結果、春日5丁目のマンション建設地点については以前に建っていた建物を避けながら基礎掘削等で破壊されるマンション本体部分を調査対象とした。調査は、盛土層、耕土層、床土層を重機によって掘り下げ、以下、遺物包含層と遺構については人力掘削を実施した。排土は場内処理とした。また、調査にあたっては、調査区に合わせた任意の地区割を設定し、遺物取り上げ及び測量のため3m×3mグリッドを設定して調査を行なった。上穂積1丁目の自動車販売店建設地点についても同様に基礎掘削等で破壊される建物本体部分を調査対象とし、重機によって盛土、耕土、床土層を掘り下げ、遺物包含層と遺構については人力掘削を実施した。排土も場内処理とし、調査にあたっては、調査区に合わせた任意の地区割を設定、遺物取り上げ及び測量のため3m×3mグリッドを設定して調査を行なった。

第2節 検出遺構と出土遺物

K S・95-2 の調査

1. 基本層序

調査区の東壁において普遍的にみられる下記の6層を基本層序とした。以下各層について概説する。

- 第1層 盛土層
- 第2層 耕土層
- 第3層 床土層
- 第4層 黄灰色砂質土層（中世遺物包含層）
- 第5層 暗褐色粘質土層（古墳時代後期遺物包含層）
- 第6層 黄色粘土層（無遺物層、地山層）

2. 遺構と遺物

今回の調査で検出したのは、古墳時代後期を中心とする溝・土壤・柱穴等であった。特に、多数検出された柱穴は、棟数を確定できないが、複数の掘立柱建物が存在していたことを伺わせた。また、近世の作業小屋と思われる4間×3間以上の掘立柱建物を確認できた。出土遺物に溝を中心に土器が出土しているが、ほとんどの遺物が包含層から出土している。遺構については比較的土器が出土していて時期が特定できる溝を中心に遺物に関しては遺物包含層を中心に概説することにした。

検出遺構（第29図）

掘立柱建物

調査区の中央部において検出した近世の作業小屋と思われる掘立柱建物である。2間×2間まで確認したが正確な建物の規模は不明である。掘方は正方形を呈し、しっかりした柱穴であったが遺物の出土はまったくなかった。埋土は灰色粘質土の単層で第2層の耕土層と同質の土であった。また、東壁に沿って同様の3間の掘立柱建物の柱穴が検出されている。

S D-02

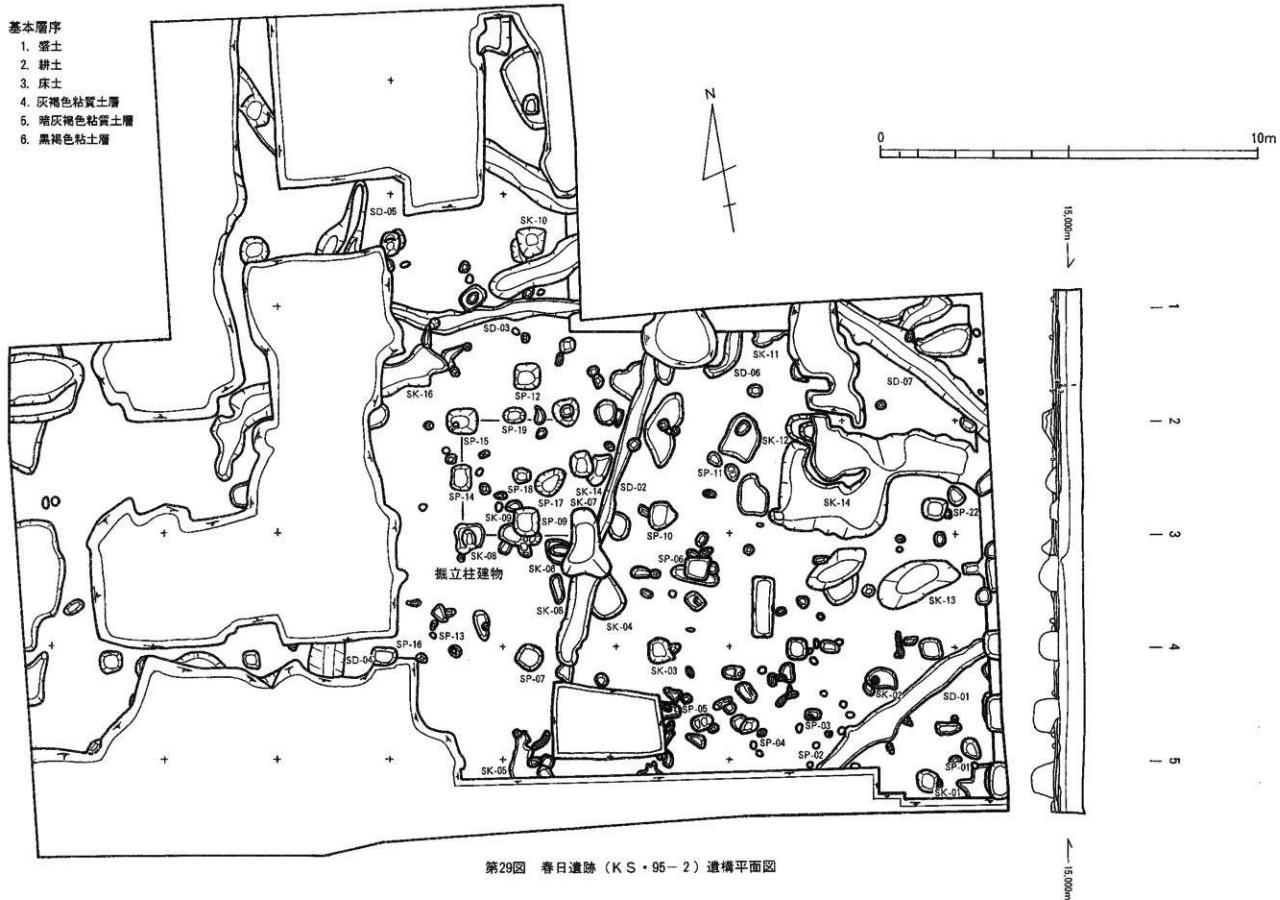
調査区の中央部において検出した古墳時代後期の南北溝である。溝の埋土からは5世紀後半の須恵器の高杯脚部が出土している。（第30図、5）

S D-04

調査区の南部において検出した古墳時代後期の南北溝である。溝の大半が擾乱によって壊されている。溝の底からは完形の6世紀後半の須恵器の杯身が出土している。（第30図、1）

S D-07

基本層序
 1. 砂土
 2. 耕土
 3. 床土
 4. 灰褐色粘質土層
 5. 暗灰褐色粘質土層
 6. 黑褐色粘土層



第29図 春日遺跡（KS-95-2）遺構平面図

調査区の北東隅において検出した古墳時代後期の溝である。溝の埋土からは6世紀後半の須恵器の杯身などが出土している。(第30図、3~4)

S K - 16

調査区の北部において検出した古墳時代後期の不定形な土壌である。土壌内からは6世紀後半の須恵器の杯身が出土している。(第30図、2)

その他の土壌及び柱穴

調査区全域で土壌及び柱穴が多数検出されたが、ほとんどの遺構が少量の須恵器や土師器の細片の出土で、所属時期も不明なものが多い。しかし、遺構の埋土が同一層であること、埋土内の時期を特定できる土器の細片の特徴からほとんどの土壌及び柱穴は古墳時代後期に属すると思われる。

出土遺物 (第30図、1~17)

今回の調査地点からの土器の大半が遺物包含層からのものである。溝などの遺構からは比較的土器の出土がみられたが図化できるものは少なかった。

S D - 04出土の土器 (第30図、1)

(1) は6世紀後半の完形品の須恵器の杯身である。焼成時の失敗作と思われ全体的に大きく歪んでいる。

S K - 16出土の土器 (第30図、2)

(2) は6世紀後半の須恵器の杯身である。

S D - 07出土の土器 (第30図、3~4)

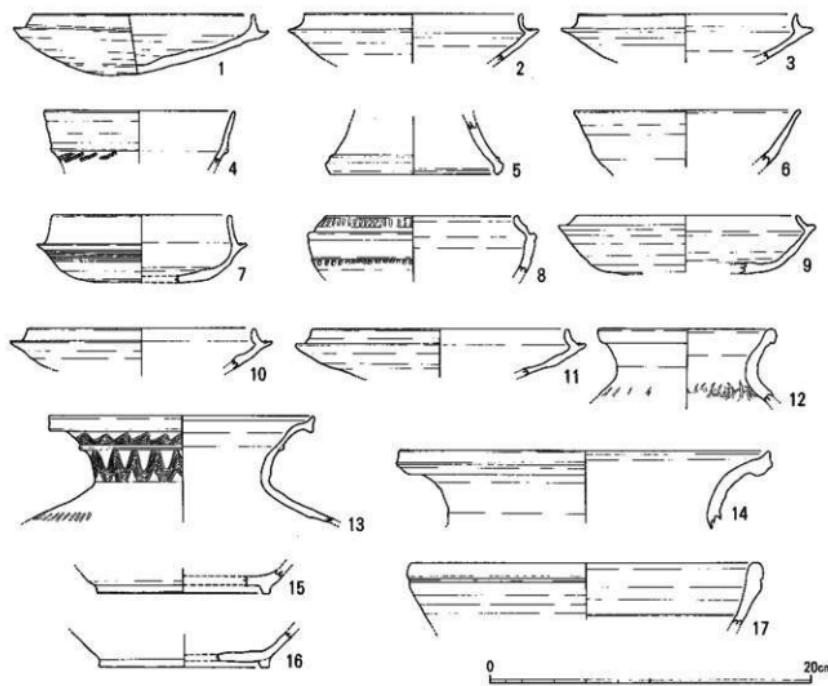
(3) は6世紀後半の須恵器の杯身である。(4) は、はそうの口縁部である。口縁部と頸部境には一条の突帯が巡る。また、頸部には櫛による列点を施す。

S D - 02出土の土器 (第30図、5)

(5) は、5世紀後半の須恵器の高杯脚部である。

遺物包含層出土の土器 (第30図、5~17)

(6) は5世紀後半の須恵器の杯蓋あるいは無蓋高杯の口縁部である。(7) は5世紀後半の須恵器の杯身である。体部外面に明瞭なカキ目調整を施す。(8) は韓式系土器の範疇で考えたい杯身である。口縁部外面と体部外面に列点を施す。同一例はあまり見かけないが、形態から考えて田辺編年のTK-73型式の土釜状の杯身に近いと思われる。(9) ~ (11) は、6世紀後半の須恵器の杯身である。(12) は壺の口縁部である。(13) は5世紀後半の小型の甕である。口縁部直下に櫛描波状文を施す。体部外面は縱方向のタタキそして内面はきれいにスリ消している。(14) は中型の甕の口縁部である。(15) ~ (16) は、奈良時代後半頃の高台付きの杯身の底部である。(17) は平安時代前期の鉢の口縁部である。口縁部直下に頸部と区切る沈線が巡る。



第30図 春日遺跡（KS・95-2）出土土器実測図

註1) 田辺昭三 1996『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

K S・95-3 の調査

1. 基本層序

調査区の北壁において普遍的にみられる下記の6層を基本層序とした。以下各層について概説する。

- 第1層 盛土層（調査以前の自動車販売店建設に伴う造成土）
- 第2層 耕土層
- 第3層 床土層
- 第4層 黄灰色砂質土層（近世～中世遺物包含層）
- 第5層 灰褐色粘質土層（古墳時代後期～中世遺物包含層）
- 第6層 明黄色粘土層（無遺物層・地山層）

2. 遺構と遺物

今回の調査の結果、古墳時代後期の円墳（1号墳）と奈良時代後半から平安時代前期の自然河道と溝等が検出されている。以下、遺物整理の終わった古墳時代後期の円墳と自然河道からの出土遺物に限定して概説する。

検出遺構（第31図）

1号墳

調査区の北部において検出した5世紀後半の埋没墳である。墳丘部は中世墳に削平されて、主体部を含めまったく残っていない。古墳の形状は円墳で、周溝と墳丘全体の約半分程検出できた。周溝の平均の幅は、5m20cm前後、深さは、平均80cm前後を測る。

周溝の埋土は大きく上層、中層、下層の3層に分かれ、上層は黄灰色砂質土で出土遺物は中世の瓦器、土師器、常滑焼の甕とともに摩滅した埴輪が多数出土した。中層は灰褐色粘質土で中世の土器はみられない。ほとんどの遺物が埴輪と須恵器で若干、6世紀後半まで下がる須恵器を含む。

下層は暗灰色粘土で、埴輪と須恵器に限定される。埴輪は、周溝内から今回の調査における全体の8割近くが出土している。特に、周溝底の地山層に接する形で衣蓋形埴輪立飾りや完形品の須恵器の杯蓋などが出土していることに注目したい。

自然河道（S R-01）

調査区の南部において検出した奈良時代後半から平安時代前期の自然河道である。北東方向から南西に流れる流路で調査区のSD-01、SD-04、SD-05が合流して流れ込む。埋土は灰色細砂を基本としている。出土遺物は須恵器の小壺や穂積廃寺に使用されていたと思われる平瓦などが出土している。

その他の溝と柱穴

調査区内で上記の自然河道に流れ込む溝以外に複数の溝と柱穴が検出されている。しかし、溝から出土する土器は細片ばかりで遺構の時期を特定するに至らなかった。また、柱穴についても同様で掘立柱建物として明確に建つものはなかった。

出土遺物（第32図）

出土遺物の大半が埋没墳である1号墳の周溝内から出土している。整理中のため今回は周溝底の地山層に接する形で出土した遺物と自然河道（S R -01）の遺物を中心に記述する。

1号墳出土の遺物（第32図、1～9、第33図、15～17）

(1) は、円筒埴輪の口縁部である。口縁部から数えて第一段目の突帯部分まで残存する。外面はヨコハケ調整、内面は斜め方向のハケ調整を施す。(2～4) は円筒埴輪の基底部である。基底部から数えて第一段目の突帯部分まで残存する。外面はヨコハケ調整、内面は斜め方向のハケ調整を施す。(5) は須恵器の杯蓋である。(6～7) は須恵器の有蓋高杯の蓋である。(8) は須恵器の杯身である。(5) は須恵器の短脚の無蓋高杯である。杯部下半に櫛描波状文を施す。(15) は須恵器の器台の口縁部である。杯部下半に櫛描波状文を施す。(16～17) は衣蓋形埴輪立飾りの破片である。両面に斜め方向のハケ調整を施す。

自然河道（S R -01）出土の遺物（第32図、10）

(10) は須恵器の小壺である。外側へやや開く高台が付く。

S D -01出土の遺物（第33図、11）

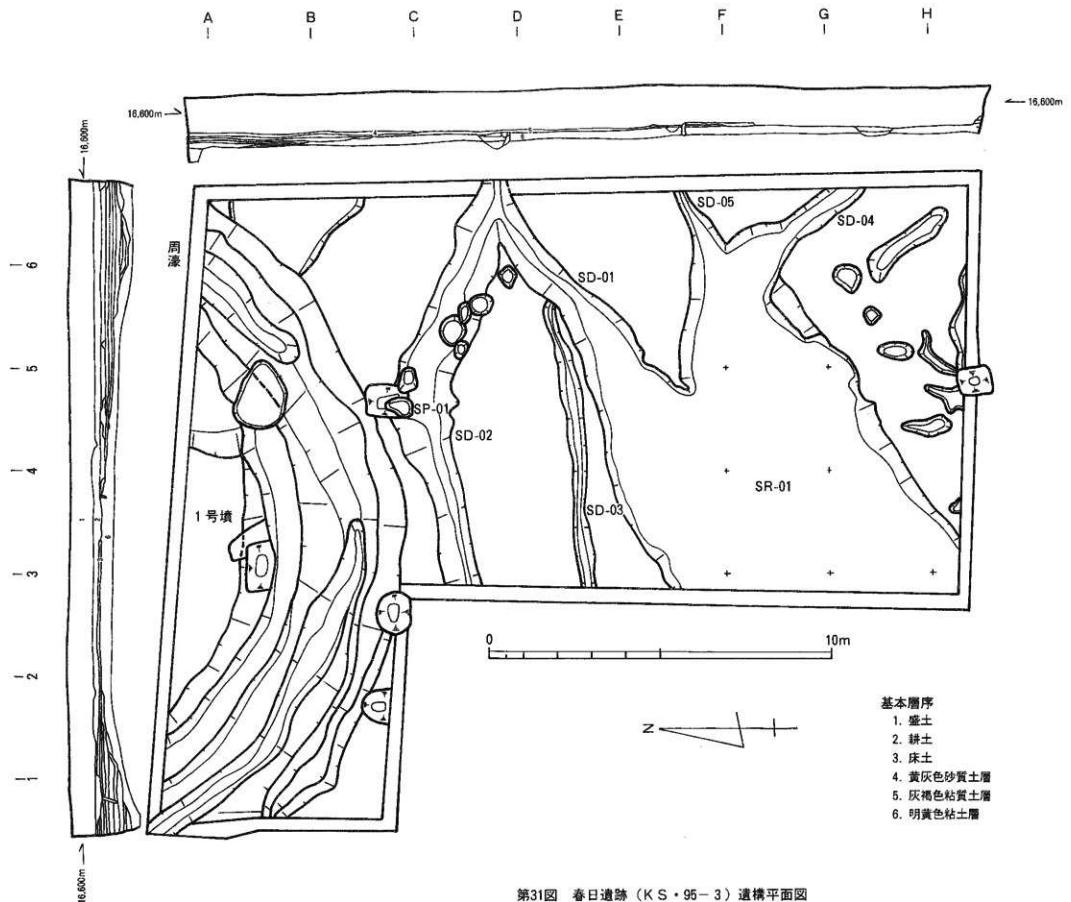
(11) は須恵器の小壺である。外側へやや開く高台が付き、頸部から胸部上半に沈線が二重に巡る。

S D -02出土の遺物（第33図、11）

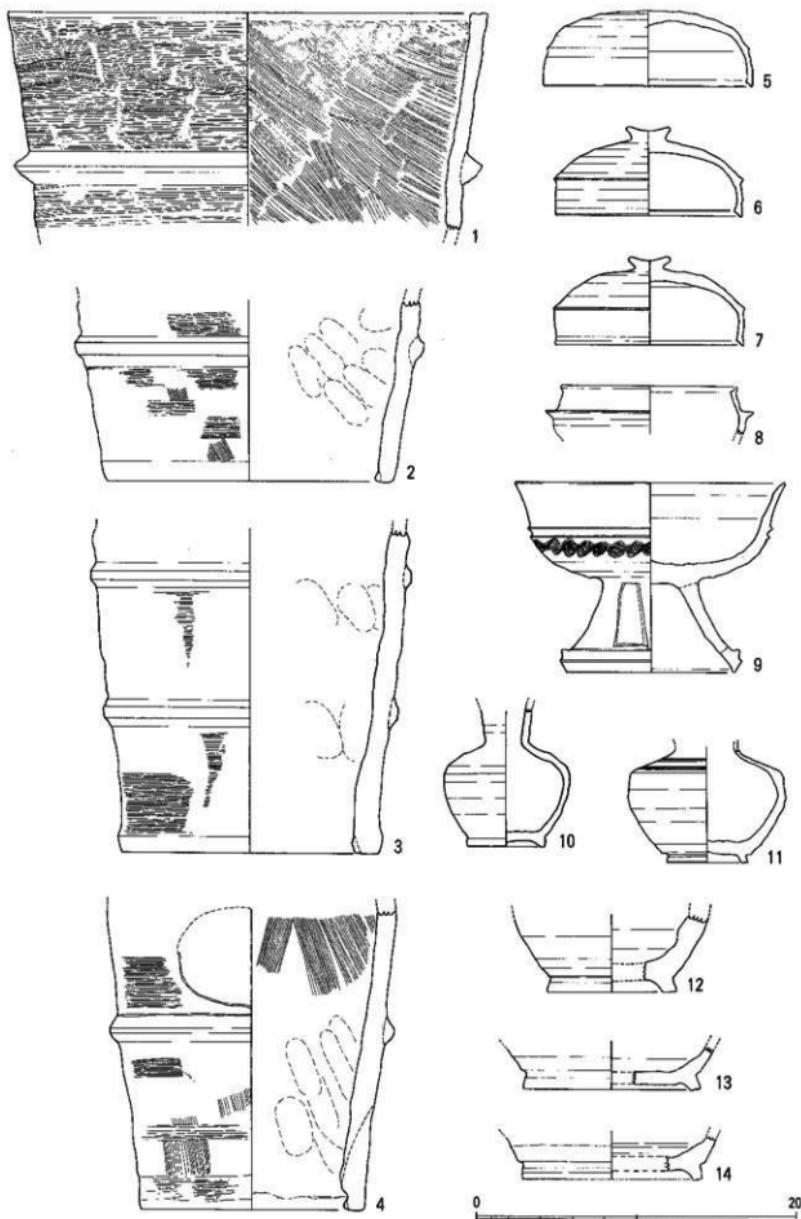
(12) は須恵器の壺の高台部分である。外側へやや開く高台が付く。

遺構面直上出土の遺物（第33図、13～14）

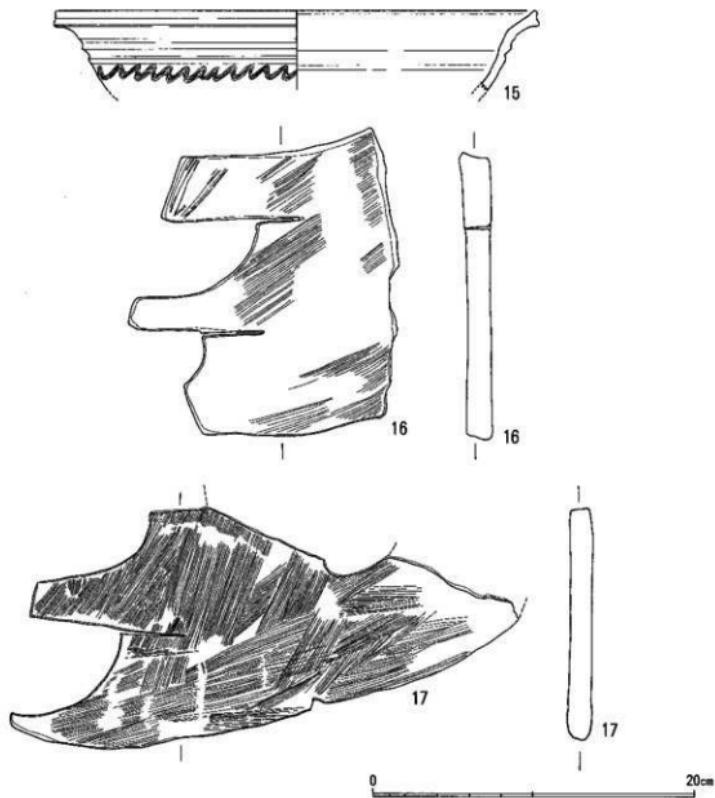
(13～14) は須恵器の壺の高台部分である。外側へやや開く高台が付く。



第31図 春日遺跡 (KS-95-3) 遺構平面図



第32図 春日遺跡（KS・95-3）出土遺物実測図（1）



第33図 春日遺跡（KS-95-3）出土遺物実測図（2）

第3節 まとめ

春日遺跡周辺地域については戦前から土器や石器の広範囲な散布が地元の人々によって知られていたが、北に位置する郡遺跡と比較すると本格的な発掘調査例は意外と少ない。今回の調査地点の春日5丁目から上穂積1丁目あたりにかけては早くから市街地化しており遺跡の様相等は長らく不明であった。近年になって再開発に伴って発掘調査が実施されているが、ほとんどが未報告の状態で各調査地点の概要すら分からぬ状態が続いている。今回、両地点の調査で判明した成果と問題点を以下に箇条書きにしてまとめとしたい。

1. 春日5丁目の調査地点（KS・95-2）の成果として、古墳時代後期の集落跡が確認されたことがあげられる。明確に構成される掘立柱建物群などは検出されていないが多数検出された柱穴は掘立柱建物で構成された集落跡を考えるには十分な証拠となろう。また、出土遺物から集落の中心時期は5世紀の中頃から6世紀の後半に求めることができる。上記の理由から春日遺跡においてこれまで漠然と考えられてきた古墳時代後期段階における集落跡の一部が判明した。次に上穂積1丁目の調査地点（KS・95-3）の成果として、古墳時代後期の円墳を主体とする埋没墳が検出された事があげられる。過去の調査から、中穂積1丁目の茨木警察署を建設するに伴う発掘調査で埋没墳が検出されている。また、今回の調査地点の東側に位置する上穂東町と南東に位置する春日2丁目の発掘調査においても遺物包含層から埴輪片が出土している。これらの事から、当該地周辺には多くの埋没墳が眠っているものと推察された。
2. 上穂積1丁目の調査地点（KS・95-3）で検出された埋没墳は、5世紀後半に築造されており、既往の調査で確認されている埋没墳も同時期であることから、千里丘陵の裾に沿って北に広がって群集していると考えられる。近畿地方では、大阪市長原古墳群や神戸市住吉宮町古墳群等で、早くから市街地化していた所から埋没墳が検出されている。造営時期も5世紀後半から6世紀前半にかけての群集墳で、主体部は木棺直葬を採用し、古墳の規模は直径20mから30m前後で墳形は円墳または方墳を主体としており、今回の検出された埋没墳と共に通している。三島地域においても近年、高槻市郡家川西遺跡や茨木市総持寺遺跡において同様の群集墳が検出されている。後者において検出された方墳を主体とする群集墳は現在報告されているだけで方墳21基と円墳1基が確認されており、今後の調査で増加することが予想されている。今回、検出された古墳と総持寺遺跡の埋没墳を比較すると墳形は方墳と円墳の違いはあるものの、古墳の規模が直径20mから30m前後、円筒埴輪をはじめとして家形埴輪などの形象埴輪まで持つこと、、蓋石は無く、主体部は木棺直葬を採用しているものと思われること、築造時期の中心が5世紀後半から6世紀前半と共通点が多いことがあげられる。当例は、三島地域に塚原古墳群や安威古墳群、新屋古墳群など山麓部に横穴式石室主体とする群集墳が出現する以前の墓制を考え上で重要な検討材料となった。

以上のように、春日遺跡の発掘調査で判明した成果を略述したが、現在、今回報告した調査地点の東隣を発掘中（KS・96-1）であり、後日、上記の調査地点を含めて報告したい。

註1) 大阪府教育委員会「総持寺遺跡発掘調査概要」1996年

第6章 安威遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 所在地 茨木市南安威1丁目695-1他2筆

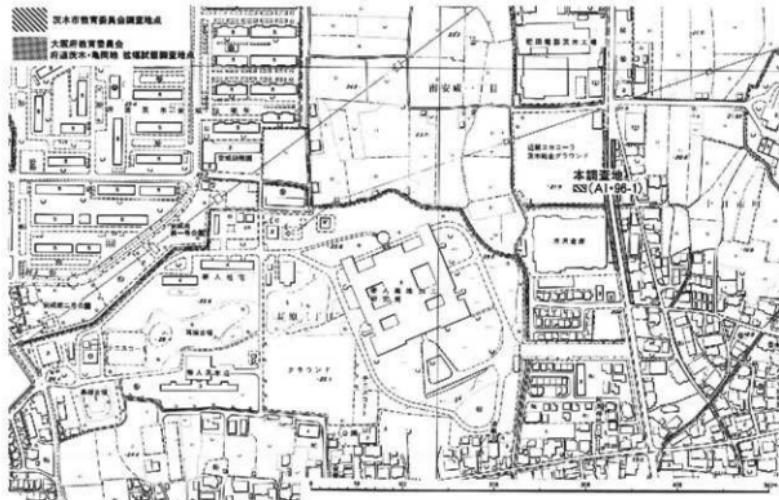
2. 調査面積 約18m²

3. 調査原因 大型販売店建設

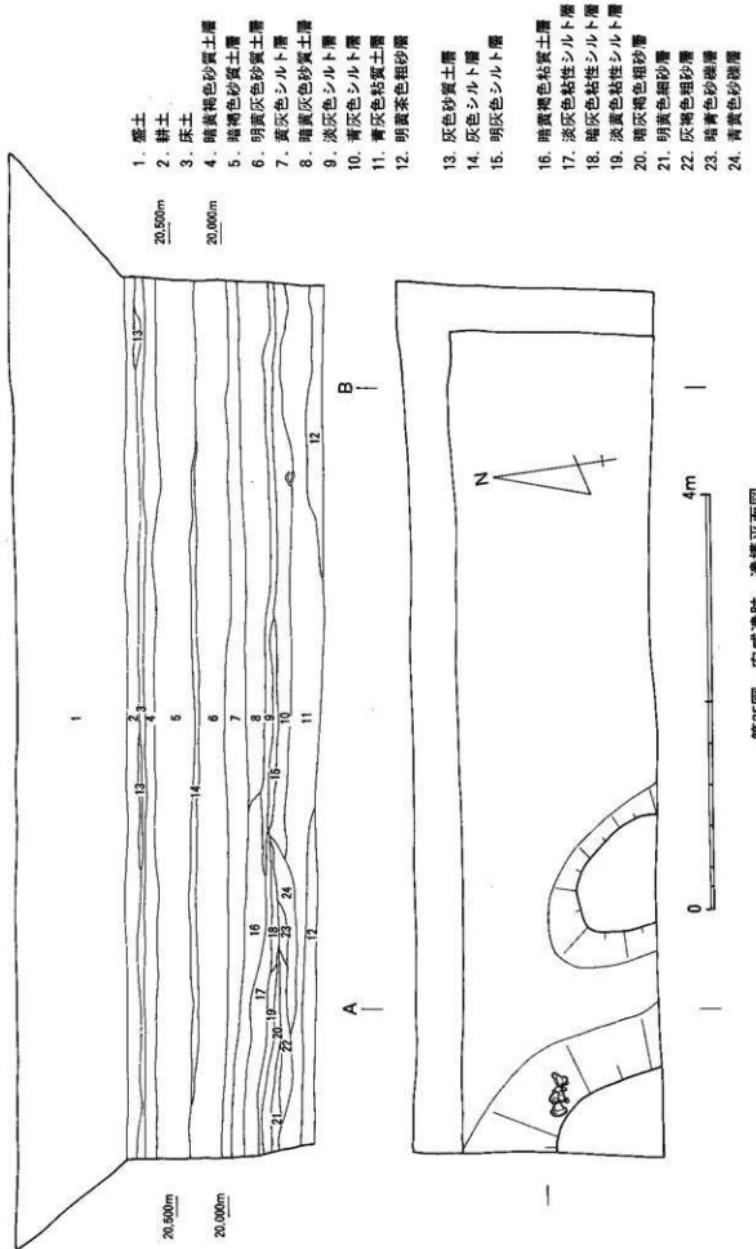
4. 安威遺跡の既往の調査と調査に至る経緯

今回の調査地点周辺の安威地域は、大規模開発が少ないため発掘調査例に乏しく具体的な遺跡の様相は不明であった。安威遺跡が知られるようになったのは、今回の調査地点の北側の山麓部を昭和23年、三島地域に在住の考古学研究者免山篤氏が古墳時代前期初頭にあたる土壙墓を調査されたことに始まる。¹⁰⁾ この調査により古墳時代前期の古式土師器の一括資料が採取され摂津地域における貴重な基準資料となった。その後、山麓部に点在する古墳時代前期から後期にかけての群集墳の調査が実施されている。特筆すれば、安威1号墳及び安威0号墳は古墳時代前期末から中期初頭の割竹形木棺を粘土でまいた粘土槨を採用し、粘土槨内からは副葬品として銅鏡や勾玉などが出土しており、三島地域の古墳を考えるにあたって考古学的に重要な遺跡となっている。

今回、茨木市南安威1丁目において大型販売店建設が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財



第34図 安威遺跡発掘調査位置図



第35圖 安寧遺跡 遺構平面圖

包蔵地の安威遺跡の南東端にあたる。このため、当該地において埋蔵文化財の状況を確認する目的で平成7年9月13日に試掘調査を実施した。試掘調査は敷地面積が広いため6ヶ所の試掘場を設け断面観察を中心に調査を実施したところ、すべての試掘場から弥生時代から中世にかけての遺物包含層と遺構が検出され、場所によって遺構の粗密の差があるものの当該地全域には良好な遺物包含層と遺構が残存するものと判断された。この試掘調査の結果をもとに依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、平成8年4月10日から発掘調査を行ない、平成8年4月26日に終了した。

5. 調査の方法

調査にあたっては、協議の結果、大型販売店の本体部分は基礎掘削深度を盛土内で収める設計変更となり、浄化槽設定部分のみを発掘調査の対象とした。調査は、盛土層、耕作土層、床土層を重機によって掘り下げ、以下、遺物包含層と遺構については人力掘削を実施した。排土は場内処理となった。また、調査にあたっては、調査区に合わせた任意の地区割を設定し、遺物取り上げ及び測量のため3m×3mグリッドを設定して調査を行なった。

第2節 検出遺構と出土遺物

1. 基本層序

調査区の北壁において普遍的にみられる下記の6層を基本層序とした。ただし、第6層以下からは自然河道の堆積層で安定していない。また、浄化槽の埋設深度の関係で自然河道の底まで掘削しておらず地山層は確認していない。以下、基本層序の6層についてのみ概説する。

- 第1層 盛土層
- 第2層 耕作土層
- 第3層 床土層
- 第4層 暗黄褐色砂質土層（近世～中世遺物包含層）
- 第5層 暗褐色砂質土層（中世遺物包含層）
- 第6層 明黄灰色砂質土層（弥生時代～古墳時代後期遺物包含層）

2. 遺構と遺物

今回の調査の結果、一時期に存在した自然河道の肩部を検出した以外、遺構は検出できなかった。ただし、自然河道の堆積層からは多くの弥生時代後期前半の土器が出上しているため、出土遺物について重点的に記述することとする。

検出遺構（第35図）

自然河道

第6層以下で検出された旧安威川と推定される自然河道である。当該地の東側の府道茨木・龜

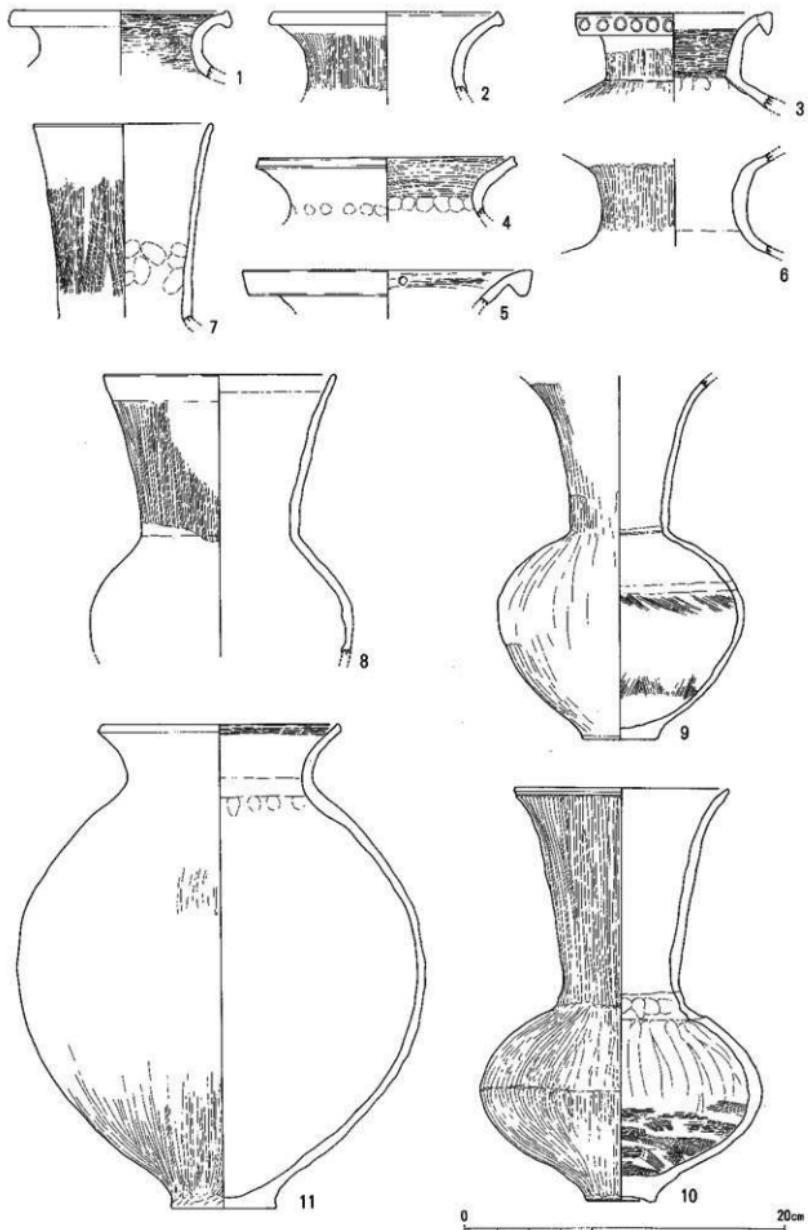
岡線拡幅に伴う試掘調査において遺物の出土はなかったがシルト層及び礫層が確認されており敷地の東側に安威川の旧河道が流れていたものと考えられる。今回の調査と試掘調査の結果から、一時期に存在した自然河道の肩部を検出したため、自然河道の西岸は今回の調査の敷地内に収まるであろう。出土遺物は弥生時代後期前半の土器が自然河道の下層を中心に出土している。

出土遺物（第36図～第38図・1～43）

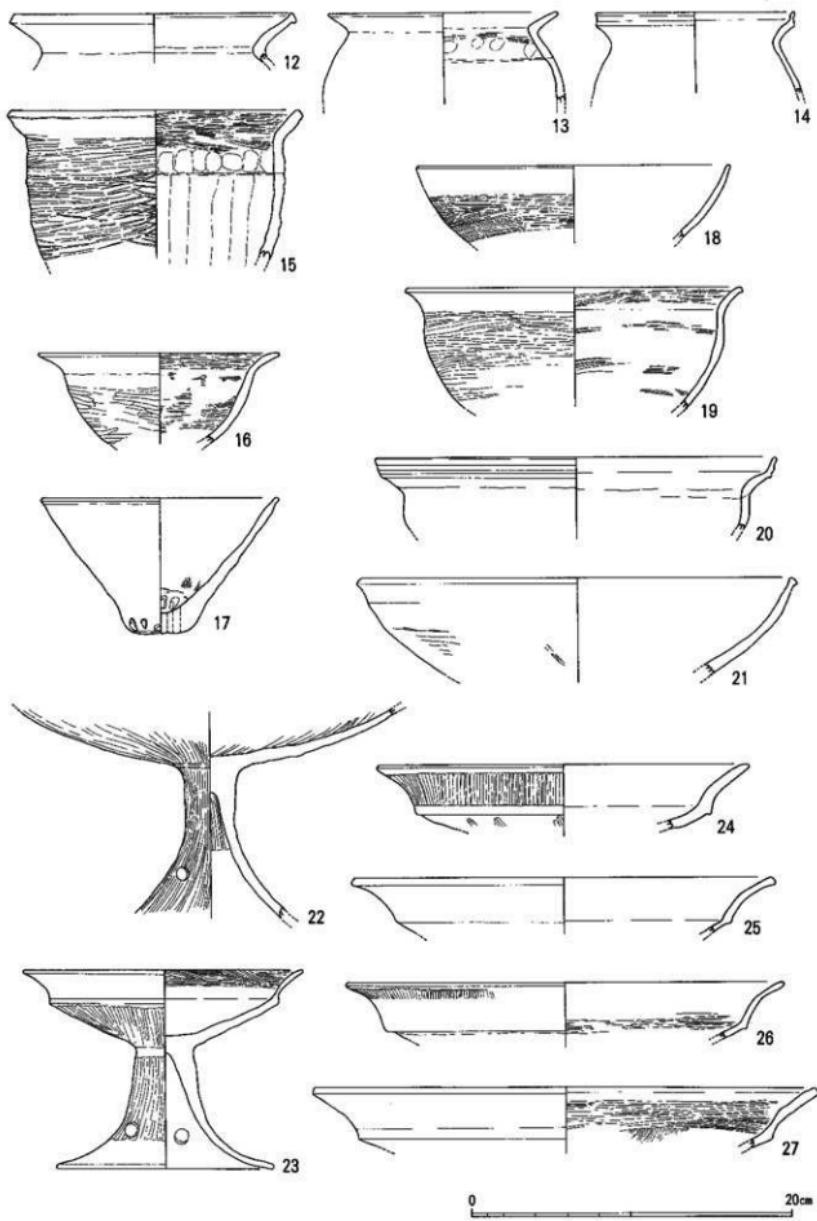
出土遺物は自然河道を中心に出土しており、一部、遺物包含層からの出土の遺物についても記述していく。

(1)～(6)及び(11)は広口壺である。(1)～(2)は口縁部はゆるやかに外反し、口縁部端に面を持つ。口縁部及び頸部内外面に細かいヘラミガキを施す。(3)は、口縁部端面円形の竹管文を施す。(5)は口縁部の形態から河内地域からの搬入土器と思われる。(11)は全体の形状が判明する広口壺で球形の脚部に平底の底部が付く。頸部から体部にかけて上から下への細かいヘラミガキを施す。

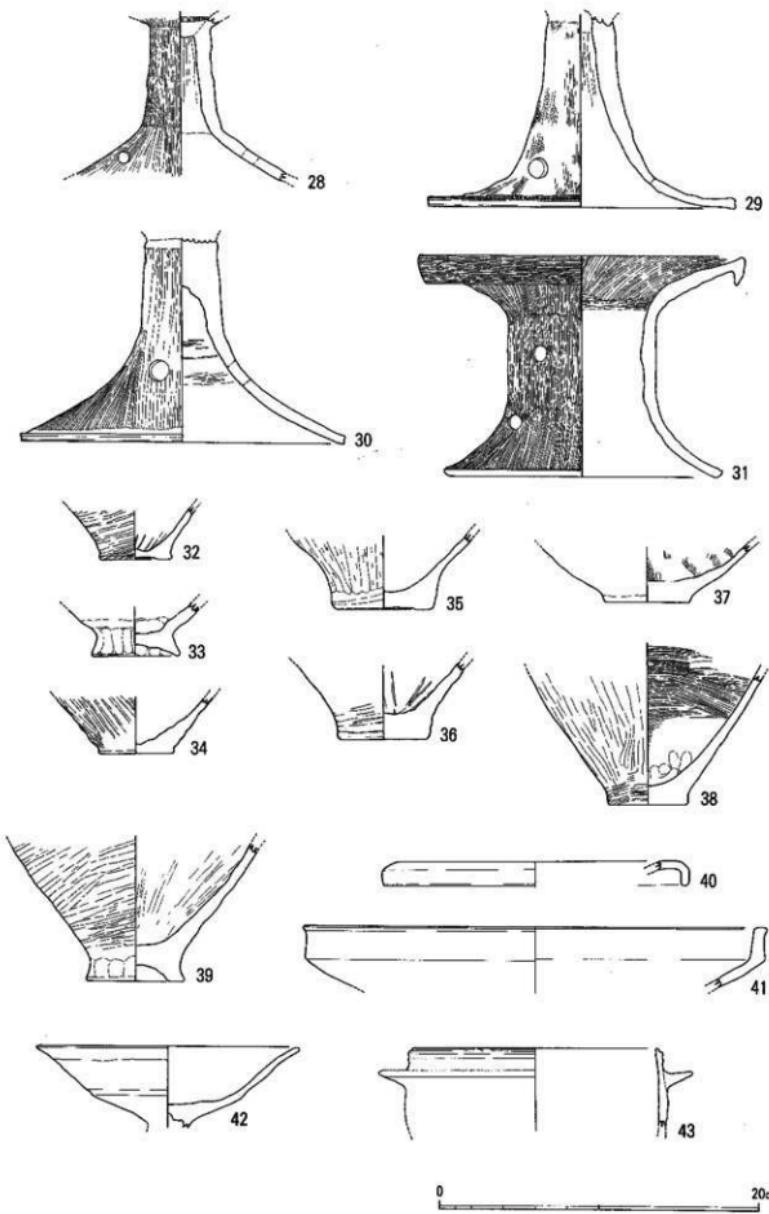
(7)～(10)は長頸壺である。口縁部がラッパ状に開くタイプの(8)～(9)そして円筒形の口縁部を呈するタイプ(7)及び(10)が出土している。特に(10)は、ほぼ完形品に近い個体で底部はやや凹む。口縁部から体部外面にかけて上から下への細かいヘラミガキを施す。(12)～(15)は甌である。頸部から「く」の字状に曲がる口縁部を呈するタイプや受け口状口縁部を呈するタイプなどが出土している。(15)は粗雑な甌で横方向の粗いタキを施し、口縁部内面は細かい横方向の刷毛目調整を施す。(16)は小型の鉢である。全体的に細かいヘラミガキを施す。(17)は甌である。底部には11ヶ所の穿孔を施す。(18)は内窓気味の鉢である。体部外面に細かい斜め方向の刷毛目調整を施す。(18)は口縁部が外反する鉢である。全体的に横方向の細かいヘラミガキを施す。(30)は受け口状口縁を呈する鉢である。口縁部外面には擬凹線を施す。近江地域あるいは丹波・丹後地域からの搬入品と思われる。(21)は大型の鉢である。(22)は大型の高杯の脚部と杯部の一部である。内外面に細かいヘラミガキを施す。(23)は、ほぼ完形品の小型の高杯である。脚部には4ヶ所のスカシ穴が穿けられている。また、内外面に細かいヘラミガキを施す。(24)～(27)は小型から大型までの高杯の杯部である。杯部は外傾し、上縁部は短く外反する。杯部の内外面に細かいヘラミガキを施す。(28)～(30)は高杯の脚部である。脚部はラッパ状に開くものと裾部が屈曲してひらくものがある。脚部外面は細かいヘラミガキを施す。ただし、(29)は脚部外面は細かい刷毛目調整を施し、脚部端には刻み目を施す。(30)はほぼ完形品の器台である。口縁部は垂下し、受部が屈曲して外反する。全体的に細かいヘラミガキを施す。脚部には上下5ヶ所づつスカシ穴が穿けられている。(32)～(38)は甌及び壺の底部である。(39)～(41)は中河内地域の生駒西麓部の胎土をもった土器である。(39)は甌の底部で上げ底を呈する。(40)は広口壺の口縁部片である。(41)は高杯の杯部である。(42)～(43)は遺物包含層から出土した土器である。(42)は古墳時代前期まで下がる高杯の杯部である。第6層から出土。(44)は中世の羽釜である。第5層から出土している。



第36図 安威遺跡 出土土器実測図（1）



第37図 安威遺跡 出土土器実測図（2）



第38図 安威遺跡 出土土器実測図（3）

第3節 まとめ

今回は、調査面積が18m²という狭いトレンチ調査であったが、多くの考古学的知見を得ることができた。これまで安威遺跡は山麓部の古墳群の調査を除いて、平野部における調査は昭和23年に初めて免山篤氏が調査¹⁾を実施して以来、本格的な調査がまったく実施されていなかったため、歴史的には著名な遺跡であるが、その実態は不明であった。今回、判明した成果と問題点を以下に箇条書きにして、まとめとしたい。

1. 今回の調査地点では、中世の遺物包含層と弥生時代から古墳時代後期の遺物包含層を確認した。造構としては旧安威川の流路跡と考えられる自然河道を検出した。この、自然河道からは弥生時代後期前半から中頃の土器群が検出した。自然河道という制約はあるが、当該期の土器の出土例は茨木市域においては少なく貴重な資料を提供することとなった。今回の出土した土器群の所属時期は、近年の摂津地域の編年における摂津V-2様式から摂津V-3様式を中心とする。²⁾一部の個体は、摂津VI-1様式まで下がるが、自然河道の堆積土中から検出されたことを考慮しても比較的まとまって出土しているものと思われる。
2. 今回、出土した土器を詳細に検討すると、壺、甕、鉢、高杯等が揃って出土している。その中で搬入土器は比較的出土していることを指摘よいであろう。搬入土器の中で一番多いのは中河内地域の生駒西麓産の胎土の土器が3点（第38図、39～41）、河内地域平野部の胎土の土器が1点（第36図、5）を確認した。また、近江地域あるいは丹波・丹後地域からの搬入土器が1点（第37図、30）出土している。
3. 自然河道から出土した土器群の時期の集落は、三島地域においては芝生遺跡ぐらいしかなく、今回、新たに安威遺跡が加わることとなった。弥生時代後期初頭における三島地域の集落動向としては弥生時代中期末の段階で東奈良遺跡や安満遺跡などの拠点集落は急速に衰退する。変わって丘陵部には古曾部・芝谷遺跡などの高地性集落が出現する。その後、少しづつ東奈良遺跡や安満遺跡などの拠点集落は再び集落活動を始めるが、本格的に活動を始めるのが弥生時代後期後半に入つてからである。古曾部・芝谷遺跡などの高地性集落が突然、集落活動を止めてしまって出現するのが、高槻市芝生遺跡と今回の安威遺跡と考えたい。
4. 今回の調査地点は弥生時代後期前半段階には旧安威川の流路跡と考えられ、出土した土器の検出状況と一時期の河道の肩部を確認したことから、敷地の西側に集落があり、そこから今回出土した土器群を投棄したものと考えたい。この集落については、今後、調査例の増加とともに確定されるであろうが、古墳時代前期まで続くものと思われる。この事は昭和23年に免山篤氏が検出した古墳時代前期の土壙墓³⁾の存在からもいえるであろう。そして、山麓部に近い場所に墓域を築造したものと考えたい。

以上のように、安威遺跡の発掘調査で判明した成果を略述したが、今後とも摂津地域あるいは近畿地方の中の安威遺跡の位置づけを検討してみる余地があるもの考えられる。

註1) 免山 篤「摂津安威の土壤遺跡」『古代学研究』12号 1955年

註2) 森田 克行「摂津地域」寺沢 薫、森岡 秀人『弥生土器の様式と編年』 1990年

図 版



目垣遺跡 (M G・93-1)

図版
1



調査地全景（南から）

目垣遺跡 (M G・93-1)

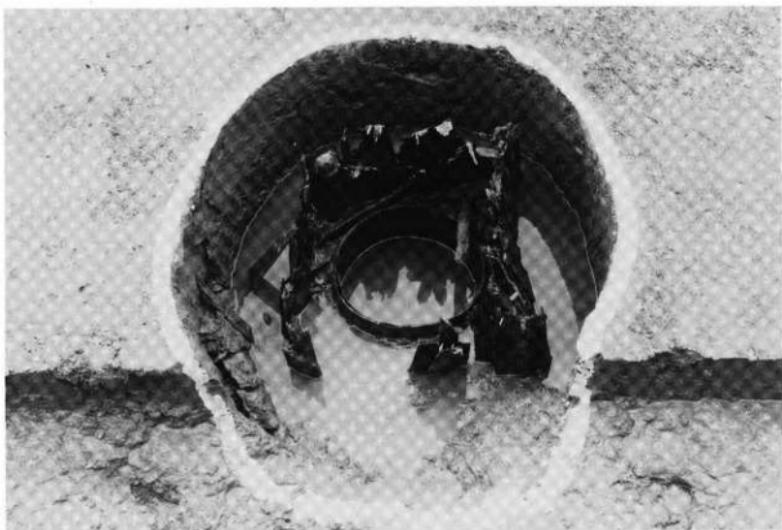
図

版

2



SE-02上面検出状況（北東から）



SE-02下面検出状況（西から）

目垣遺跡 (M G · 93- 1)

図版
3



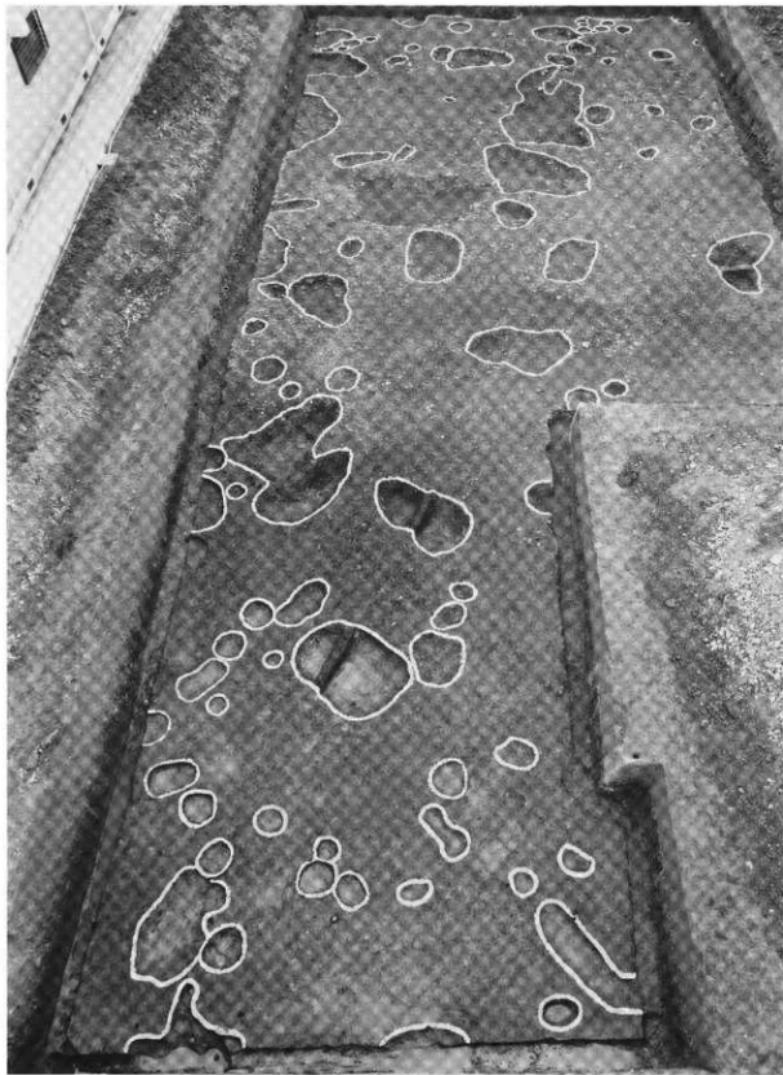
S E - 04直上瓦器・土師皿検出状況（東から）



S E - 04 検出状況（東から）

耳原遺跡 (MH・94-1)

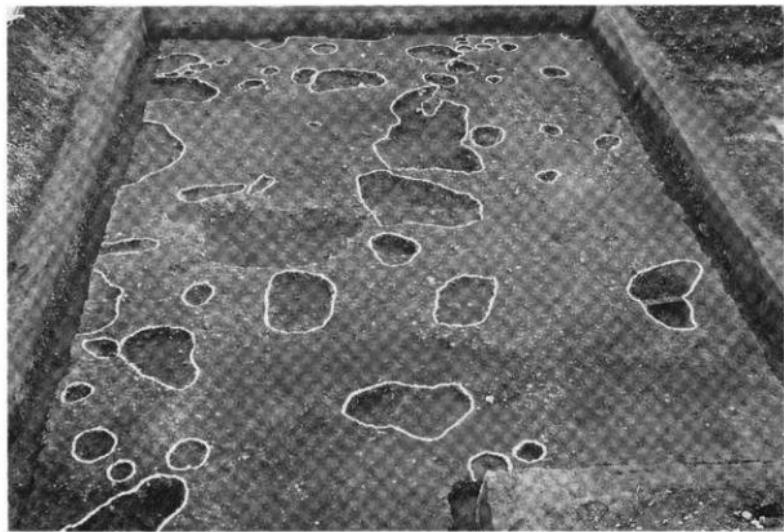
図版
4



調査地全景 (東から)

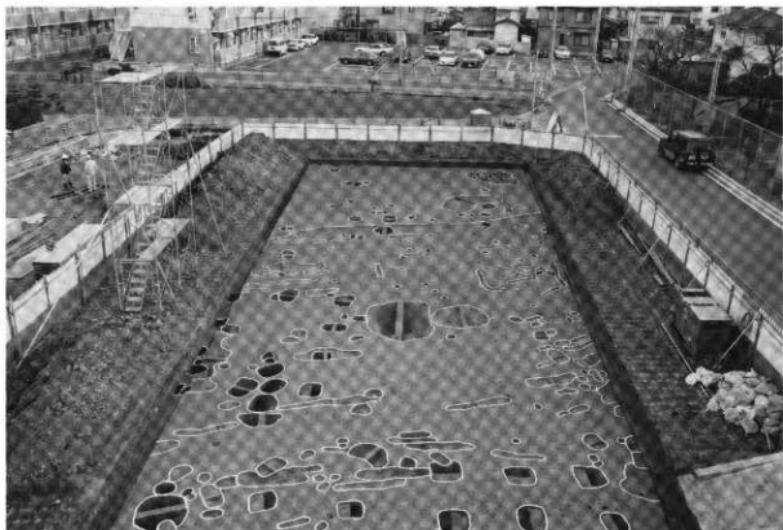


調査地東半部全景（西から）

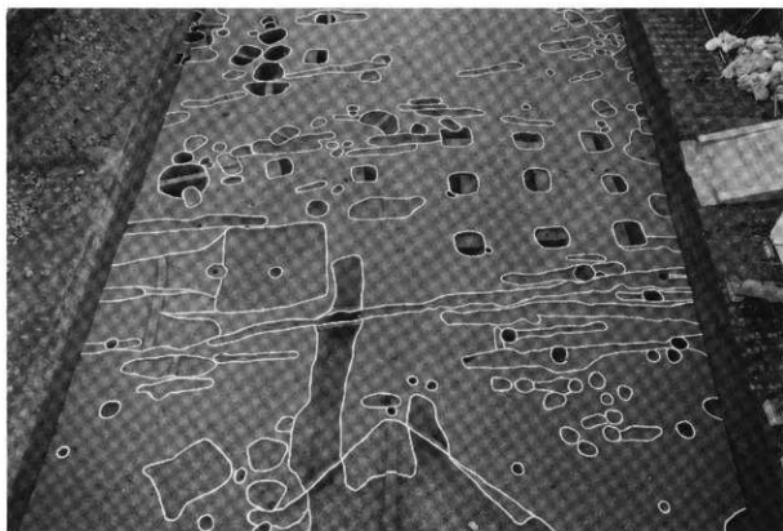


調査地西半部全景（東から）

總持寺北遺跡（S J - N • 95 - 1）



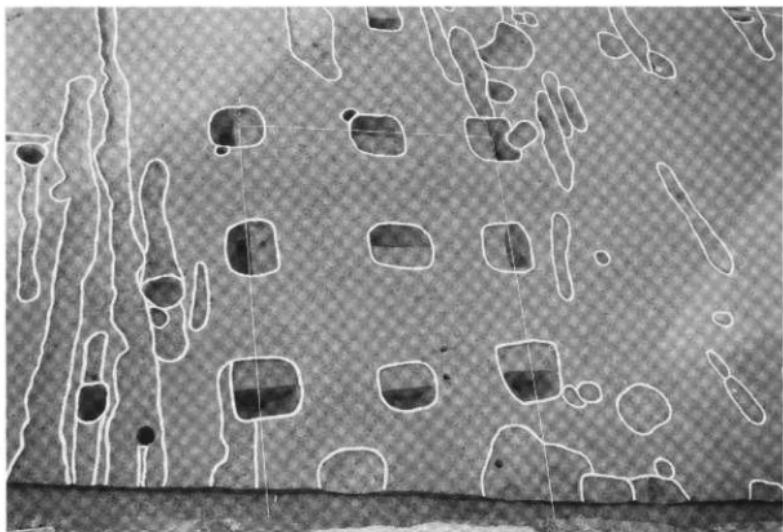
調査地東半部全景（西から）



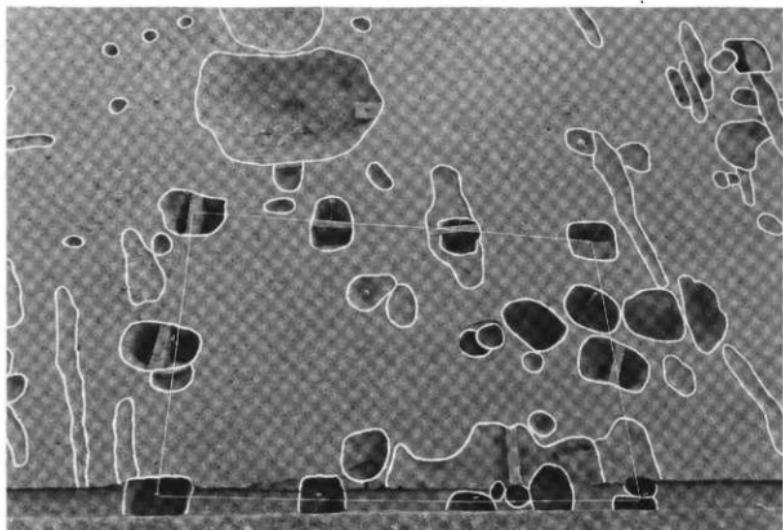
調査地西半部全景（西から）

總持寺北遺跡 (S J - N • 95-1)

図版
7



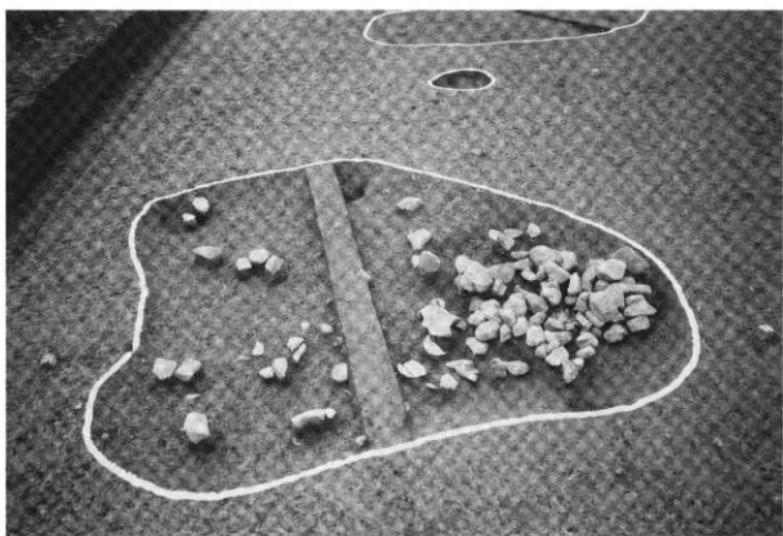
S B - 01検出状況 (南から)



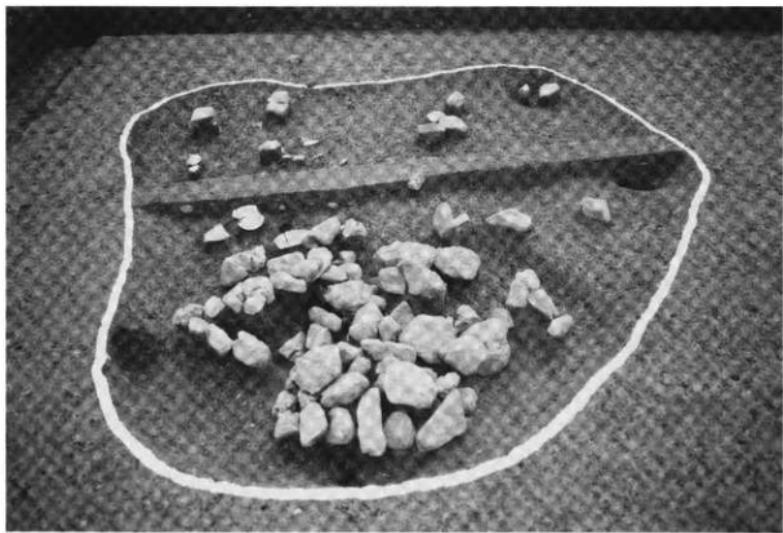
S B - 02検出状況 (北から)

總持寺北遺跡 (S J - N • 95 - 1)

図
版
8



S K - 12遺物出土状況 (東から)



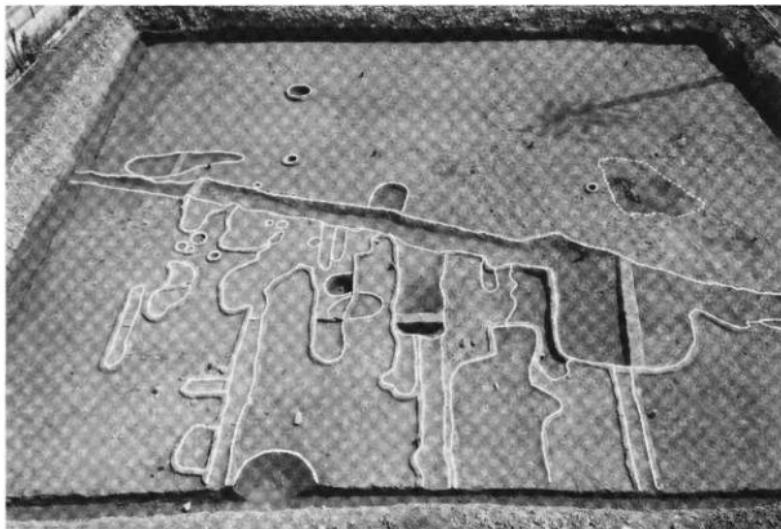
S K - 12遺物出土状況 (北から)

總持寺北遺跡 (S J-N・96-1)

図版
9



調査地全景（南から）



S D-01他検出状況（北から）

春日遺跡 (K S・95-2)

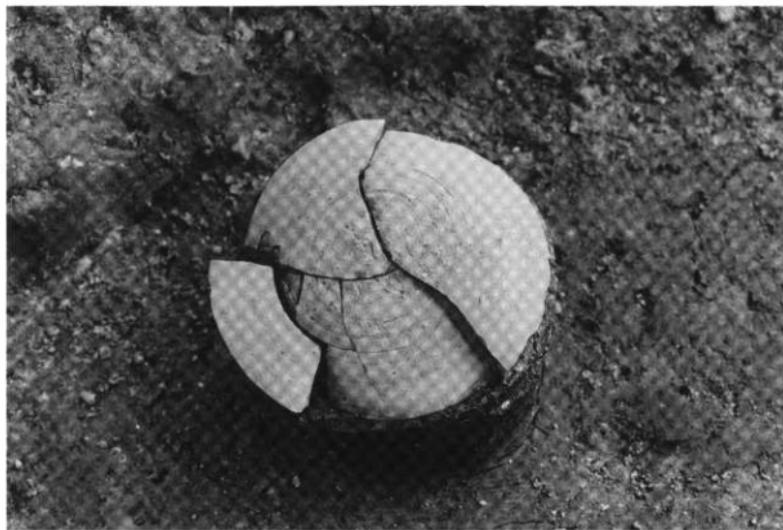
図

版

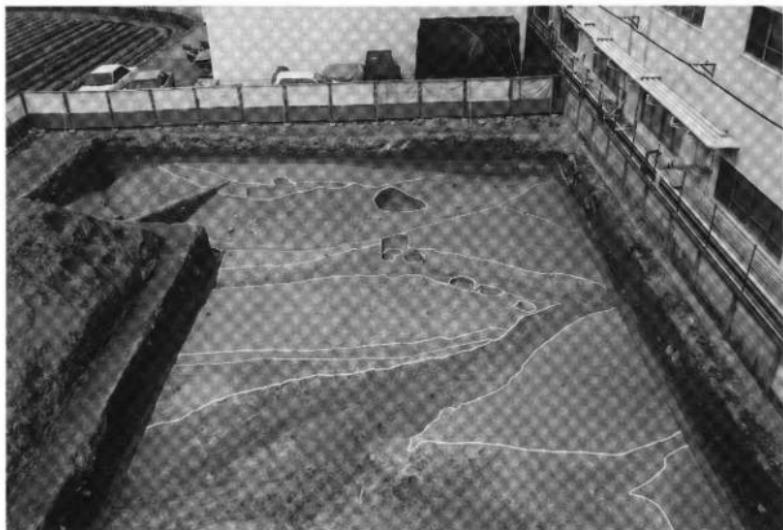
10



調査地全景 (南から)



S D-04須恵器破片検出状況 (南から)



調査地全景（南から）



1号墳全景（南から）

春日遺跡 (K S・95-3)

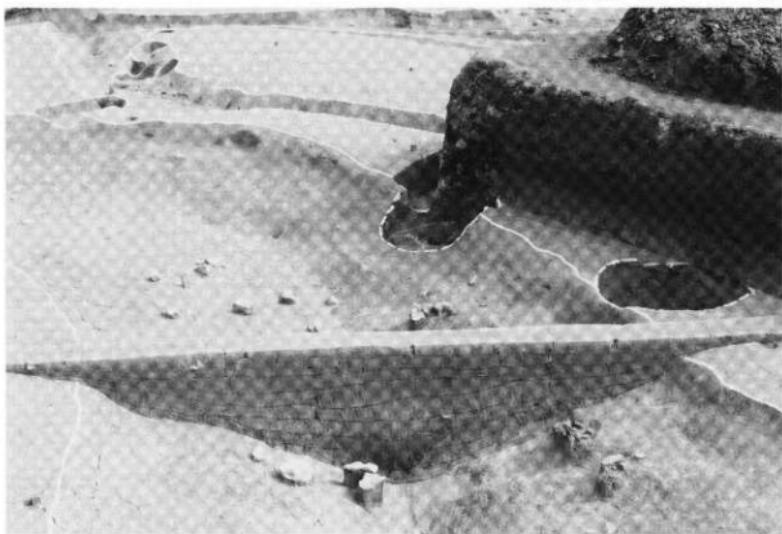
図版
12



1号墳周溝西半部全景（南から）



1号墳周溝東半部全景（南東から）



1号墳周溝内断面（西から）



1号墳周溝内蓋形埴輪の立飾り検出状況（西から）

春日遺跡 (K S・95-3)

図

版

14



1号墳周溝内出土坏蓋検出状況（南から）



1号墳周溝内出土坏蓋検出状況（南から）